

# 聖徒の道

12  
1995



末日聖徒  
イエス・キリスト  
教会

# 聖徒の道

1994年12月号



表紙——「キリスト降誕の聖なる物語には、学ぶべき教訓が数多く秘められています。」ジェフリー・R・ホランド長老は「クリスマスはお店では買えません」(p. 12)の中で、そう語る。トーマス・S・モンソン副管長の「クリスマスの贈り物、クリスマスの祝福」(p. 2)から、子供たちの演じる「イエスの誕生」(p. 32)まで、今月号には、そのような教訓があちこちに載る。どの記事も救い主の誕生が真実であることを証している(表紙のモデルの撮影——スティーブ・バンダーソン)。

こどものページ——「わたしのもとに来なさい」(W・B・カークパトリック画)

## 一般

大管長会メッセージ——クリスマスの贈り物、クリスマスの祝福 第一副管長トーマス・S・モンソン .....	2
神殿の入り口で デニス・レイ .....	10
クリスマスはお店では買えません ジェフリー・R・ホランド .....	12
クリスマスの精神はだれにも奪えませんが デビー・フォッツァー .....	18
敵が彼の友となった デュアン・C・ノールズ .....	26
イエスの誕生 .....	32

## 青少年

言葉を超えて ウィリアム・ポーリー .....	8
「天使たち、これからどちらへ？」 デビー・オルリアン .....	20
クリスマスなんて パトリシア・R・ローパー .....	22
ドミンゴス・リアオの日々 リチャード・M・ロムニー .....	40
贈り物リスト リサ・A・ジョンソン .....	46

## 定期特別記事

読者からの便り .....	1
家庭訪問メッセージ——「さらに聖くなお努めん」 .....	25

## こども

アメリカ大陸のクリスマス .....	2
歌 マリヤのララバイ (子守歌) ジャン・アンダーウッド・ピンボロー、ダーウィン・ウォルフオード .....	4
たんけん——生まれたばかりの王様にささげるおくり物 ジェラルディン・A・ギャレットソン .....	6
分かち合いの時間——あたえること カレン・アシュトン .....	8
おじいちゃんとおばあちゃんの伝道地のクリスマス ジャナ・ジョーンズ・スティード .....	10
手作りのクリスマス クリスマスツリーのかざり、雪をふらせよう .....	13
友だちになろう ハンガリーのブダペストから——ホルバス家の3人の子供たち ジャネット・ピーターソン .....	14

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊——チェコ語、ブルガリア語、ハンガリー語、アイスランド語、ロシア語。

大管長会：ゴードン・B・ヒンクレ、トーマス・S・モンソン、ジェームズ・E・ファウスト  
十二使徒定員会：ボイド・K・バックナー、L・トム・ベリー、デビッド・B・ヘイト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オーグス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット、ロバート・D・ヘイルズ、ジェフリー・R・ホランド、ヘンリー・B・アイリング

編集長：ジャック・H・ゴーズリンド  
顧問：スペンサー・J・コンティ、L・ライオネル・ケンドリック  
教科課程管理部責任者  
実務部長：ロナルド・L・ナイトン  
企画・編集ディレクター：ブライアン・K・ケリー  
グラフィックスディレクター：アラン・R・ロイボーグ

国際機関誌スタッフ  
編集主幹：マービン・K・ガードナー  
編集主幹補佐：R・バル・ジョンソン  
編集副主幹：デビッド・ミッチェル  
編集補佐/こどものページ：ディーン・ウォーカー  
工程管理：メアリーアン・マーティンデル  
出版補佐：ベス・デーリー  
デザインスタッフ  
機関誌グラフィックスディレクター：M・M・カワサキ

アートディレクター：スコット・バン・カンペン  
デザイナー：シェリー・クック  
制作主幹：ジェーン・アン・ピーターズ  
制作：レジナルド・J・クリステンセン、デニス・カービー、マシュー・H・マックスウェル  
予約販売スタッフ

購読管理ディレクター：B・レックス・ハリス  
配送部長：クリス・クリステンセン  
マーケティング部長：ジョイス・ハンセン、ケント・H・ソレンセン

聖徒の道 1995年12月号第39巻第12号  
発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
〒106東京都港区南麻布5-10-30  
電話 03-3440-2351

印刷所 株式会社 リック/クロスロード  
定価 年間予約/海外予約2,400円(送料共)  
半年予約1,200円(送料共)  
普通号/大会号200円

Copyright © 1995 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—1993年10月 翻訳承認—1993年10月 原題—International Magazines December, 1995. Japanese. 95992300  
●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/00100-6-41512)にて管理本部 経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。  
●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部 経理課 ☎03-3440-2351 (代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター ☎044-811-0417

The Seto No Michi (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150. Subscription price \$14.00 a year. \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to Seto No Michi at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

伝道の助け

わたしは宣教師になってから、『リアホナ』(スペイン語版)の価値に気づくようになりました。福音の真理を求める求道者を教えるとき、いつもこの機関誌の中で、役立つ記事を見つめます。

わたしは『リアホナ』が届くのを、毎月心待ちにしています。特に、ローカルページに紹介される地元の教会活動を読むのが好きです。

メキシコ、ヌーエボラレード地方部  
ビベロス支部  
ピアド・ヘレゾン長老

楽しいこどものページ

『リアホナ』(英語版)とこどものページの『フレンド』に、わたしは心から感謝しています。わたしのめいは教会員ではありませんが、よくわたしの家に来ては、毎月『フレンド』を熱心に読んでいます。子供向けの話やゲームを読みながら、福音と教会の教えを自然と学んでいるのはもちろんです。

『リアホナ』を読むとわたしの証は強められ、世界中の忠実な教会員の方々に励まされます。

フィリピン、カルーカンステーク  
マラボンワード  
ウィルフレド・サレム・サントス

自分で予約購読

わたしたちはつつましくも、とても幸せな家族です。バプテスマを受けたのは1993年ですが、ずっと教会員で、イエス・キリストの福音によって祝福を受けてきたような気がします。

わたしたちは最初は『リアホナ』(ポルトガル語版)に関心がありませ

んでした。ところがある特別な宣教師が貸してくれた『リアホナ』を読んでからは、すぐに自分たちで予約購読したいと思いました。今では1冊でも読めないと、非常な霊的損失のように感じます。

すばらしい機関誌をありがとうございます。

ブラジル、ポルトアレグレ北ステーク  
カチョエイリニアワード  
カルロス、エリアンヌ・デ・プラット

読むのが楽しみ

毎月『デア・シュテルン』(ドイツ語版。「星」の意)を楽しみにしています。『デア・シュテルン』を読み、福音によって強められるのは喜びです。イエス・キリストの福音に従って生活する世界中の聖徒たちについて知るのも、すばらしいことです。わたしたちの子供たちも、毎月この機関誌が届くのを楽しみにしていて、『キンダーシュテルン』(こどものページ)を読むのが大好きです。

スイス、ベルンステーク  
バルドシュートワード  
D・コーフマン

靈感に満ちたメッセージ

『リアホナ』(英語版)に心から感謝しています。この中には心を高揚させる靈感に満ちたメッセージが、ぎっしり詰まっています。熱心に読むので、時々日刊の『リアホナ』があればと思うほどです。教会員ではない人も含め、友達に貸した後は、ファイルにとじ込んで保管しています。

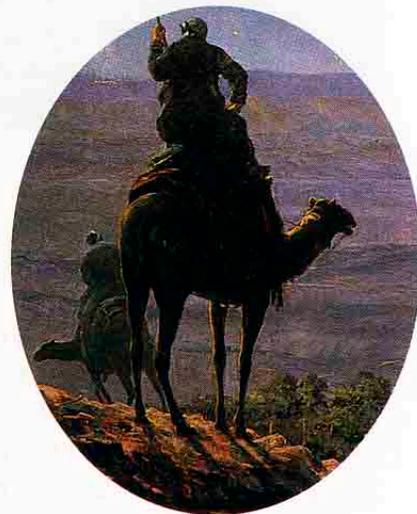
フィリピン、トレド地方部  
トレド第2支部  
アービン・S・アティオ



# クリスマスの贈り物、 クリスマスの祝福

第一副管長

トーマス・S・モンソン



「クリスマスに何をもらった？」1年中で最も盛大に祝われる休日の次の日には、世界中の子供たちがこの同じ質問をします。小さな女の子はこう答えるかもしれません。「わたしはお人形さんに、新しいドレス、おもしろいゲームもだわ。」男の子の答えはこうでしょう。「ぼくはポケットナイフと自動車。ライトのつくトラックもさ。」新しい贈り物を見せ合い、自慢し合っているうちに、クリスマスの朝が明け、そして過ぎていきます。

こうして得た贈り物は、はかないものです。人形は壊れ、ドレスは着古され、おもしろいゲームも飽きてしまいます。ポケットナイフはなくしてしまい、自動車もいつまでも同じレールの上を走っているだけです。電池の力が弱まり切れてしまえば、トラックも顧みられなくなります。

クリスマスの質問は、一言言葉を入れ替えるだけで、結果が随分違ったものになります。「クリスマスに何をあげた？」この質問によってわたしたちは考えさせられ、優しい気持ちになり、記憶のともしびをよみがえらせます。

キリストを拝むために遠方から訪れた博士たちも、わたしたちが無私の精神で真心からささげるものに勝る贈り物はしなかった。

得ることではなく、与えることによって、クリスマスの精神は生かされます。人々は敵を赦し、友を思い起こし、神に従います。クリスマスの精神は、心の窓から見える景色を照らし出します。わたしたちはこの世の忙しい生活に目をやって、物ではなく、人にもっと関心を寄せるようになります。

わたしが主にささげられるものは何だろう。  
この貧しいわたしが。  
わたしが羊飼いだったら、  
子羊をささげよう。  
博士だったら、  
自分の務めを果たそう。  
しかし、このわたしが主にささげられるものは何だろう。  
ささげよう、自分の心を。  
(クリスティーナ・ジョージナ・ロセッティ)

与えることがもらうことにとって代わるクリスマスの日を、人はいつまでも忘れません。わたしにとってそれは、10歳のクリスマスが近づいたときのことでした。当時の少年の夢は電気仕掛けの自動車でした。わたしの夢も、どこにでもある安いぜんまい仕掛けの自動車ではなく、電気で動く不思議な自動車でした。ちょうど不況の時代でしたが、父母は何とか工面したのでしょう。クリスマスの朝にすてきな電気仕掛けの自動車をプレゼントしてくれました。

わたしは機関車に車両を引っ張らせて前進させたり、後退させたりして何時間も遊びました。やがて母が居間に入って来て、道の向こうに住んでいるハンセン家のマークという子供にぜんまい仕掛けの自動車を買ってきたと教えてくれました。ハンセン家族は母子家庭でした。わたしはその自動車を見せてほしいと頼みました。自動車はゴツゴツでずんぐりとしていて、わたしを買ってもらった高価な自動車のようにすべすべとスマートではありませんでした。しかし、安い方の自動車に付いていたオイルタンカーが気に入りました。わたしのにはそのような車両が付いておらず、ねたましい気持ちが起こってきました。わたしはその気持ちを母にぶつけ、母はそれに負けてわたしにオイルタンカーを渡しながらか、「マークよりもあなたの方に要するというなら、使いなさい」と言いました。わたしはオイルタンカーを自分の自動車にくっ付けて、してやったりと思いました。

母とわたしは残りの車両と自動車を持って、マーク・ハンセンのところを尋ねました。マークはわたしより1、2歳年上でした。彼には思いもかけないプレゼントなの

で、言葉が出ないほど喜んでくれました。彼は早速ぜんまいを巻き、自動車が動いて2台の車両と車掌車がレールを走りだすと、わたしのように電気仕掛けではないのに、大喜びしました。

母は賢明にもわたしに「トミー、マークの自動車はどう？」と聞きました。

わたしは罪の意識を鋭く感じ、自分のわがママがよく分かりました。わたしは母に、「ちょっと待っていて、すぐ来るから」と言いました。

わたしは走って急いで家に帰り、先ほどのオイルタンカーと、さらに自分の車両の一つ加えて手に取り、ハンセン家に戻りました。そしてうれしげに、「君のに付いていたのがもう二つあったの、忘れていたんだ」とマークに言いました。マークはもう2台の車両を自分のセットに付け加えました。自動車が重そうにレールを走るのを見ながら、わたしは言いようのない、決して忘れられない大きな喜びを感じていました。わたしの心にはクリスマスの精神が満ちていました。

このときの体験は、ちょうど1年後にわたしが直面した難しい決心を、しやすくしてくれました。クリスマスの季節がまたやって来ました。家ではオープンに入れる大きな七面鳥の料理の準備が進み、おいしいごちそうを今か今かと楽しみにしていました。ところが近所に住む遊び友達に、びっくりするような質問をわたしにしたのです。「七面鳥って、どんな味がするんだろう。」

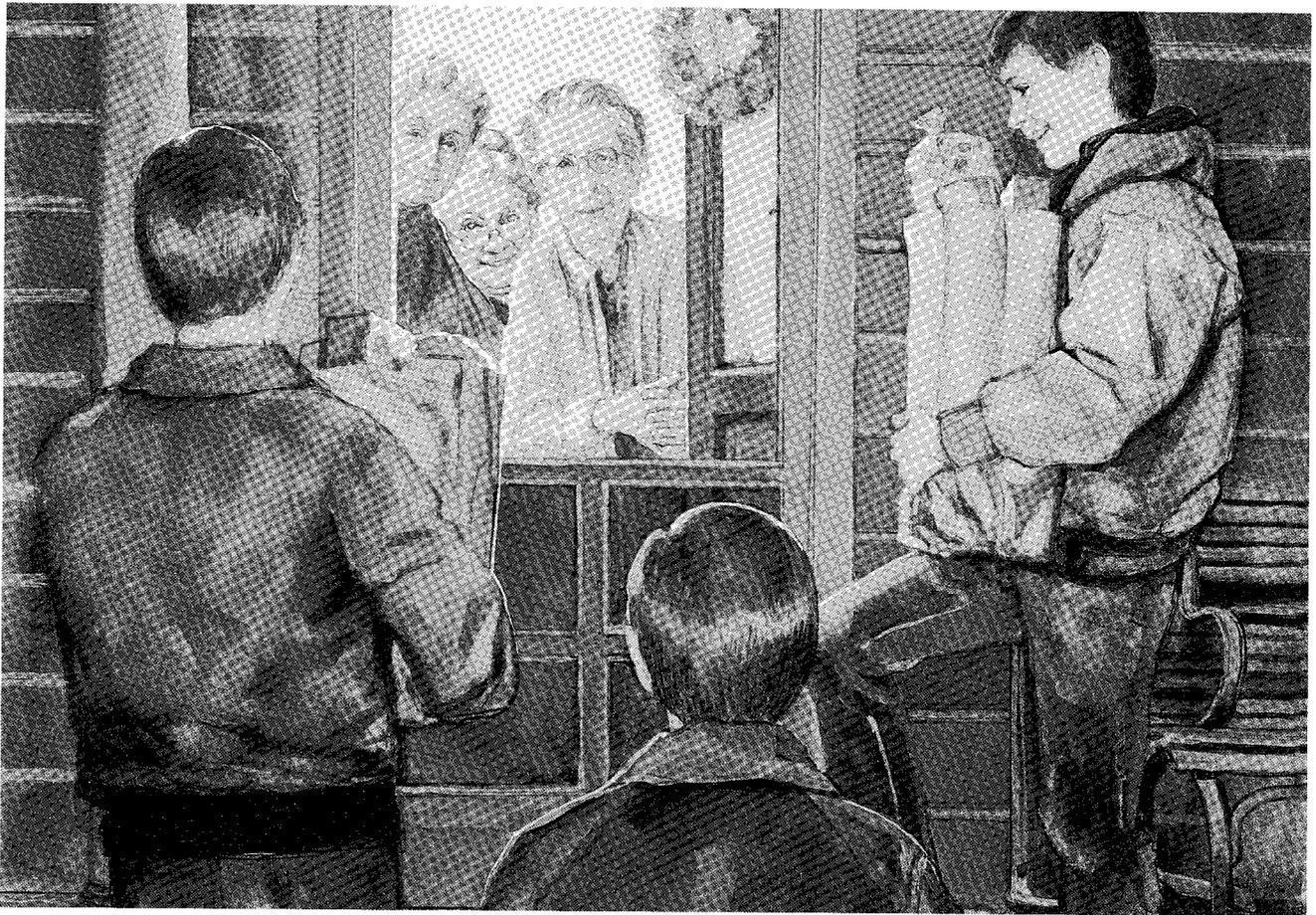
「チキンと同じような味さ。」

「チキンって、どんな味かなあ。」

そのとき初めて、わたしはこの友達が七面鳥もチキンも食べた経験がないことを知りました。わたしは、クリスマスに彼がどんな食事をするのか尋ねました。友達はしばらく返事をせず、うつむいたまま、こう言いました。「知らない。ぼくんち、何もないもの。」

わたしは一つの解決策を考え出しました。自分には何もありません。七面鳥も、チキンも、お金もありません。そのとき、わたしはうさぎを2匹自分で飼っていたことを思い出しました。わたしはその2匹を箱に入れ、友達に渡してこう言ったのです。「ほら、このうさぎ、2匹ともあげるよ。チキンみたいに、おいしいよ。」

友達は箱を受け取ると、垣根をよじ登り、一目散に家に向かって行きました。クリスマスの食事が無事手に入ったからです。空になったうさぎ小屋の扉を閉めながら、わたしの頬に涙が伝いました。悲しかったわけではありません。温かく、言いようのない喜びがわたしの心を満たしたからです。それは忘れられないクリスマスになりました。



ILLUSTRATED BY DALE KILBOURN

少年たちは助けの必要な人々に心に向け、自分たちでためたパーティー資金を使って、クリスマスの贈り物を用意した。これは長く忘れられない祝福となった。

13歳のある若い男性のことが思い出されます。彼は執事定員会を導いてみごとにクリスマスの精神を見いだしました。この少年と仲間たちは、夫に先立たれて独り暮らしをする、貧しい老婆のたくさん住む地域に住んでいました。少年たちはすばらしいクリスマスパーティーを開くために1年間かけて貯金し、計画を立ててきました。クリスマスはほかの人々のことを考える季節である、というクリスマスの精神に目覚めるまで、少年たちは自分のことばかりを考えていたのです。少年たちのリーダーであるフランクは、今までためてきたクリスマス資金を、自分たちの計画していたパーティーには使わず、近所に3人で一緒に住んでいる老婆のために使おうと提案したのです。

少年たちが自分で立てた計画ですから、監督だったわたしとしては、従わないわけにいきません。新しい試み

に胸を躍らせながら、少年たちは特大のローストチキンやポテト、野菜、クランベリー、それに伝統的なクリスマスの祝いに必要なものはすべて買って来ました。少年たちは宝物の贈り物を老婆たちの家まで持って行きます。少年たちは雪の降る中を通して、崩れ落ちそうになった玄関にやって来ました。ドアをたたくと中からゆっくりとした足音が聞こえ、ドアが開けられました。

13歳ごろの特徴とも言える、調子外れの声で、少年たちは「<sup>きよ</sup>聖し、この夜、星は光り」と歌い、それから贈り物を渡しました。昔、かの栄光ある夜に歌った天使よりも美しく歌い、あの博士たちの贈り物よりも大きな意味を持つ贈り物をしたのです。わたしは、あの子のすばらしい婦人たちの顔を見詰め、心の中で彼女たちが「だれかの母親」であることを思い起こし、気高い少年たちの表情を見たとき、彼らも「だれかの息子」であることを思いました。そのとき、わたしの心にはマリー・ダウ・ブラインのあの不滅の詩が思い出されました。

その婦人は年老いて、みすぼらしく、白髪で、冬の寒空の下で腰を曲げていた。

通りは、降ったばかりの雪でぬれている。  
婦人の足もとは、老いて動きも緩慢だ。  
彼女は交差点に立って、もう長いこと待っている。  
ただ独りでいる彼女を、顧みる人もなく、  
人の群れはそばを過ぎて行く。  
彼女の目に浮かぶ不安の色にも気づかずに。  
通りの向こうから、笑い声や叫び声が聞こえてきた。  
下校途中の華やいだ声に包まれて、  
少年たちが羊の群れのようにやって来た。  
白く深く積もった雪を喜びながら歩いて来る……。  
一人の少年が彼女の傍らで足を止め、低くこうささや  
いた。

「よかったら、向こうに渡るのをお助けします。」

……

「少年たちよ、分かるだろう、この婦人もだれかの母親だ、

たとえ老いて、貧しく、動きが鈍くても。  
わたしの母親にはだれかが手を貸してほしいと思う。  
彼女の愛する息子が遠く離れているとき、  
彼女が貧しく、老いて、白髪であっても。」

こうして「だれかの母親」は頭を垂れ、  
その晩、彼女の家でこう祈る。

「神よ、あの気高い少年にお恵みを与えてください。  
彼もだれかの息子であり、誇りであり、喜びですから。」  
(「だれかの母親」)

定員会の少年たちはだれ一人、この尊い巡礼を忘れは  
しませんでした。クリスマスの贈り物はクリスマスの祝  
福になったのです。

時は移り、時代は瞬く間に流れて行きますが、クリ  
スマスはいつまでも神聖です。クリスマスの精神がわた  
したちの生活の一部になるのは、得ることによってでは  
なく、与えることによってです。神は今もお語り、導き、  
祝福し、与えていらっしゃいます。

何年も前のことですが、ハロルド・B・リー長老が、  
ワイオミング州のスターバレーで育ったバラントイン長  
老の経験を、わたしに聞かせてくれたことがあります。  
ここは荒涼とした土地です。夏は短く、たちまち終わっ  
てしまい、一方、冬はいつまでも腰を据え、冷氣をもた  
らします。バラントイン長老は子供のころの特別なクリ  
スマスについて語りました。

「父にはたくさんの子供がいます。時々、家族で収穫  
を終えると、支払いを済ませた後には、ほとんど蓄えの

残らないことがありました。ですから、父は遠くまで出  
かけて、恐らく1日1ドルくらいで、幾つかの牧場で働  
きました。父は自分の糊口をしのぐのがやっとで、家で  
待つ母や子供たちに仕送りがほとんどできず、家にはだ  
んだん物が乏しくなり始めました。

わたしたちは食卓の周りに集まって家族の祈りをささ  
げました。父が家にいなかったある晩、家族が集まり、  
母が子供たち一人一人のコップに、ピッチャーで牛乳を  
注いでくれました。ところが母の分がありません。子供  
たちだけでピッチャーが空になったことに気づいたわた  
しは、母に自分の分を勧めて言いました。「お母さん、  
ほら。ぼくのを飲みなよ。」

「いいの。お母さんは今晚は、おなかがすいてないの  
よ。」

わたしは心配になりました。子供たちは銘々の牛乳を  
飲んで、ベッドに入りましたが、わたしは寝つけません。  
布団から抜け出して、階段を爪先でそっと下りて行くと、  
母が部屋の中央で、ひざまずいて祈っています。はだし  
で階段を下りて来たわたしの足音に、母は気づいていま  
せん。わたしはひざまずいて、母の祈りを聞きました。

『天のお父様、家に食物がなくなりました。どうか、お  
父様、どなたかの心に触れて、子供たちが朝おなかをす  
かせなくて済むように助けてください。』

母は祈り終わると、こちらを振り向いて、わたしが祈  
りを聞いていたことに気づき、何かドギマギした様子で、  
こう言いました。「さあ、もう行きなさい。何も心配な  
いわよ。」

母の信仰に支えられて、わたしはベッドに戻りました。  
翌朝、目を覚ますと台所から鍋や皿の音が聞こえ、食物  
を調理するよい香りがするのです。わたしは階下へ下  
りて行き、こう言いました。「お母さん、確か、食物が  
ないって言ってたよね。」

これに対して母はこう言っただけでした。「主が祈り  
にこたえてくださるとは思わなかったの?」それ以上は、  
何の説明も必要ありませんでした。

後年、わたしが大学に行くために家を離れ、結婚して、  
家族に会いに戻ってみると、当時はもうかなりの高齢に  
達していたガードナー監督が、わたしにこう言ったん  
です。「君の家族について、クリスマスのときにわたしが  
経験したことを教えよう。一日の務めを終えて、家族で  
夕食を取った後だった。わたしは暖炉のそばで新聞を読  
んでいたんだ。突然声が聞こえて、こう言ったのさ。

「バラントイン姉妹の家に食物がなくなった。」わたし  
は自分の妻が話しかけたと思い、「母さん、何て言った  
んだい」と尋ねたんだ。彼女は前掛けで手をふきながら



ILLUSTRATED BY ROBERT T. BARRETT

神は信仰篤い母親の祈りを聞いて、善良な監督に導きを与えられた。監督の運んだ食物は、肉体と霊に養いを与えた。

やって来て、「わたしを呼んだ、お父さん？」と言うんだ。

「いや、母さんと呼んだんじゃない、わたしに話しかける声が聞こえたもんだから……。」

「何て言ってたの？」

「バランティン姉妹の家に食物がない、って。」

すると母さんはこう言ったのさ。「それじゃ、靴を履きコートを着て、バランティン姉妹の家に食物を持って行った方がいいわ。」冬だったが、その晩、わたしは馬車を出して、小麦粉の袋、牛肉、果物の缶詰、焼き上げたばかりのパンを荷台に積んで行ったのさ。寒い晩だったが、君の母親が迎えてくれたときは、すっかり温かい気持ちになって、食物を渡したんだ。神様が母親の祈りを聞いてくださったんだね。』

困っている人、求めている人、主を信頼する人、祈る人、主が語る時に耳を傾ける人がいるかぎり、神はそれらの人々を心に留めてくださいます。「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネ3:16) 神の贈り物は、わたしたちの祝福になりました。どうかクリスマスの日に、そしていつでも、すべての人が心を大きく開いて、主を迎えてくださいますように。□

#### ホームティーチャーへの提案

1. 得ることではなく、与えることによって、クリスマスの精神は生かされます。
2. 相手の生活の必要を満たすような方法で与えることによって、キリストの御霊はわたしたちの生活の一部になります。
3. 神は困っている人、求めている人、主を信頼する人、祈る人、主が語る時に耳を傾ける人を、いつも心に留めていらっしゃいます。

# 言葉を超えて

ウィリアム・ポーリー

夏 休みにロシアのボルガ川を船で旅しました。その辺りには教会がまったくなかったので、日曜日は独り船室にこもって『モルモン書』を読もうと思っていました。

ところが、ある末日聖徒の家族も同じ船を借りて夏の旅行をしていると聞き、わたしは予定を変更することにしました。その家族は、教会指導者の許可を得て、ロシア人を含む教会員の乗船客のために礼拝行事の計画をしていたのです。聖餐の祝福を頼まれたわたしは、一人で祝福をしなければならないのだろうか、青少年は自分一人なのだろうかと少し不安な気持ちになりました。

10時ごろになって礼拝が行われる広間に入りました。ネクタイをした青年やドレスを身にまとった少女を見かけると、そわそわしていた気持ちがようやく落ち着きました。聖餐のテーブルらしいものがあるだろうか、と辺りを見回すと、右手の方に、食堂から借りてきた白いテーブルクロスが、ピアノの長いすの上に広げているのに気づきました。パンと水のトレーが白い布の上に置かれています。わたしに祝福を頼んだ兄弟が、一人の青年を紹介してくれました。

「この方はセルゲイ兄弟です。一緒に祝福をしてくれます。」

彼は、最近、軍隊の任務を終えてモスクワから帰還したばかりでした。地下鉄で二人の宣教師に出会ったのがきっかけでパプテスマを受けたそうです。

「ドーブリー ジェン。」わたしは習いたてのロシア語であいさつしました。

「ドーブリー ジェン。」にっこりと笑いながら彼はこたえてくれました。

「ミニャ ザブート、ウィリアム」と自己紹介しました。

「ミニャ ザブート、セルゲイ。」

「英語は話せますか」と尋ねてみました。

「ええ、少しなら。」

セルゲイは何度も使ってぼろぼろ

になった紙を引っ張り出して広げました。そこには、英語の教会用語とロシア語での定義が書かれていました。セルゲイは聖餐式での自分たちの役割分担を決めるつもりで、その中の『聖餐』という言葉に差しました。わたしはうなずきました。次に彼は「パン」という言葉を差してから自分を指差しました。

「ぼくは？」と聞きました。

すると、「水」という言葉を指で示してから、わたしを指差しました。伝えたいことはすぐ分かりました。こうして彼がパンを祝福し、わたしが水を祝福することになりました。

「ダー」とロシア語で同意の気持ちを伝えました。

音楽の伴奏が始まり、ウラジミールという青年が「恐れず来たれ、聖徒」の指揮をしました。部屋のカーテンは開け放たれ、窓からはロシアの広々とした田園風景が目に入ってきます。

セルゲイが持っていた『モルモン書』はよく使い込まれていました。聖餐の祈りをささげるために彼はページをめくりました。

わたしたちは立って、ロシアの生地を使った手作りのパンを裂きました。皆が「主イエスの愛に」を歌うのが







## 神殿の入り口で

デニス・レイ

ユタ州バウンティフル神殿のオープンハウスに参加するため、わたしと家族は胸をわくわくさせて列に並んでいました。神殿の中は靴カバーを付けて通っていただきます、とガイドの人が説明しました。雨混じりの雪の中、その日だけでも数万もの人々が見学しているのです。神殿をきれいに保つのに靴カバーが役に立つのは明らかでした。

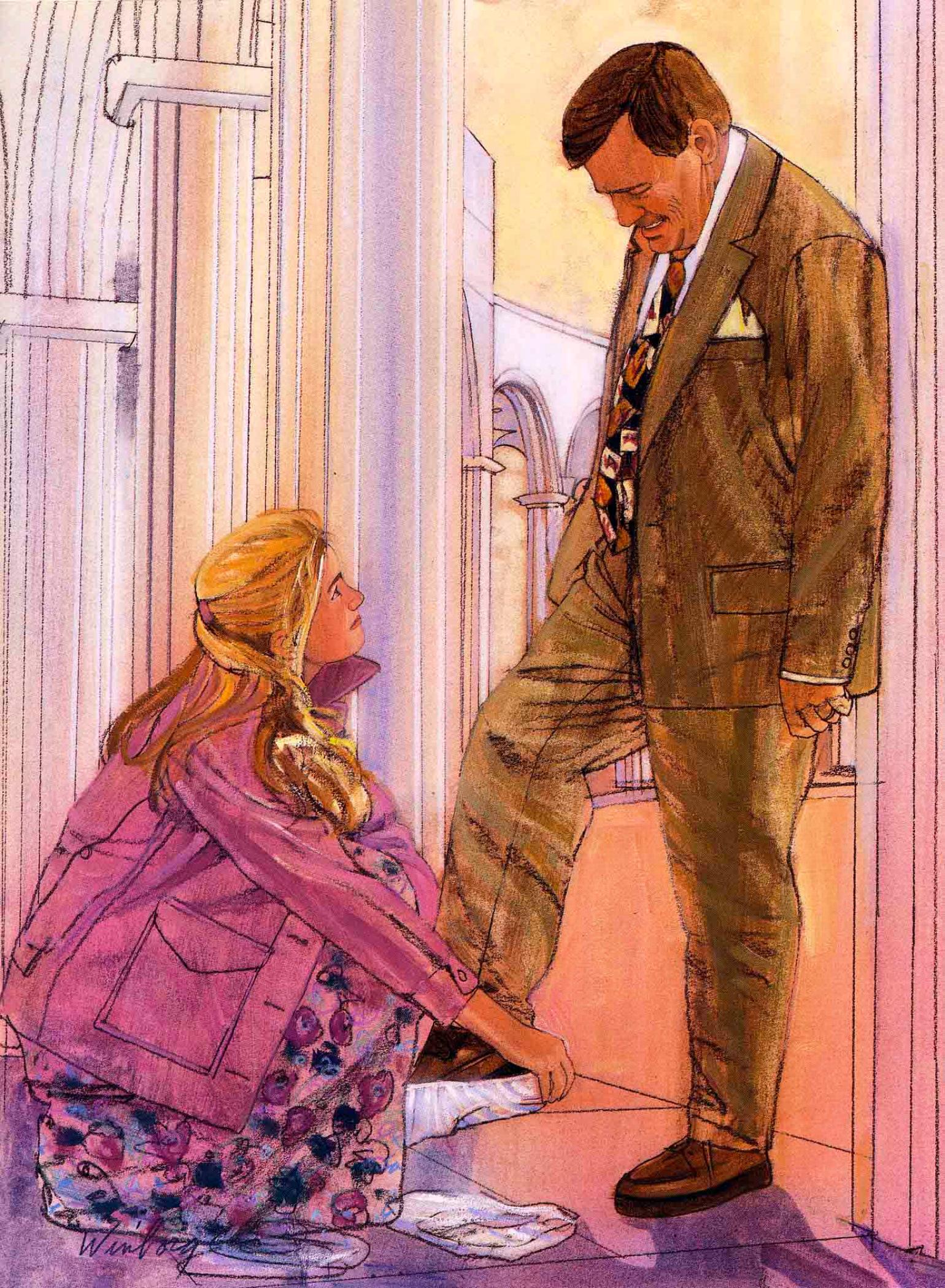
わたしは、靴カバーは自分で付けるのだと思い込んでいました。しかし、神殿のドアにたどり着くと、近くのステーキから奉仕に来ていた若い男女が数人、見学者の靴にカバーをかぶせているのが目に入りました。あまりの思いがけない光景に驚きながらも、気がついたときには、片方ずつ足を持ち上げて、奉仕の若い女性の助けを受けていました。これくらい自分でできるのと思いつつ、当惑してしまいました。それに、この寒い中、しゃがんだ窮屈そうな姿勢で、ぬれて泥に汚れた靴にカバーをかぶせるのは、決して楽しい作業ではないだろうに、と思ったのです。その若い女性がカバーを付け終わったとき、わたしは言葉少なにお礼を言いました。それにこたえた彼女の笑顔と思いやりあふれた態度は、数千人を助けた後だというのに、心のこもった優しいものでした。

わたしはこの若い女性の奉仕の業に感動し、圧倒され

ていました。すると突然、心が甘美な思いで満たされたのです。もし、今日ここに、メシヤがおられたなら、きっとこの人たちと同じように、穏やかに、そして無私<sup>きよ</sup>の心で、汚れたものを清めるために奉仕なさるのではないだろうか。大きな感動に包まれ、わたしは救い主の深い愛を感じていました。わたしたちが最も崇高で聖いものを受けることができるように、主はゲツセマネの園でひざまずき、ゴルゴタの丘で死んでくださったではありませんか。

見学している間中も、敬虔<sup>けいけん</sup>な思いはわたしを離れませんでした。神殿の美しさもさることながら、わたしの脳裏にいちばん強く残ったのは、神殿の入り口でのあの出来事でした。

それから間もなく、わたしはステーキ副会長の職を解任になりました。解任されて数日の間、主は次にわたしをどんな職に召してくださるのだろうかと思いつらしました。いわゆる「重要」と考えられている召しでしょうか。それとも、人の目に留まらない、静かな親切を行う召しでしょうか。どちらでもかまいません。ひざまずいて奉仕するときはどこにいても、キリストもかつて、わたしたちすべてのためにひざまずいて奉仕してくださったことを決して忘れることはないでしょう。□





# クリスマスは お店では 買えません

十二使徒定員会会員  
ジェフリー・R・ホランド

クリスマスの物語を語る目的の一つは、クリスマスがお店では買えないことをわたしたちに思い出させる、という点にあります。実際、毎年クリスマスを子供のように喜んでいても、年を重ねる度にその意義の奥深さを感じるようになるものです。ベツレヘムで起きたあの夜の出来事について、『聖書』から何度読もうと、その度に今まで思いつかなかった新しい思いが一つ、二つ、心に浮かんできます。

キリストの降誕について記された神聖な記録は、わたしたちに数多くの教訓を残しています。その中の一つだけを強調してほかのすべてをわきに押しやるのは、ためらわれますが、今日わたしはあえてそれをしたいと思います。お許してください。

わたしの心を離れない一つの思いがあります。この物語が、非常に貧しい家族の物語だという点です。ルカは「客間には余地がなかったからである」とは書かず、「客間には彼らのいる余地がなかったからである」と書いていますが、そこには何か特別な意図があったのではないかと思います（ルカ2：7，下線付加）。確かではありませんが、わたしが思うに、当時も現代と同じように金銭が物をいう社会だったのではないのでしょうか。もしもヨセフとマリヤが地位や財産を持っていたなら、混み合う時期でも宿を探すことはできたでしょう。

またジョセフ・スミス訳で、だれも彼らに客間にいる余地を与えなかったという表現は、二人に有力な知り合いがいなかったことを示しているのではないかと思います（ジョセフ・スミス訳ルカ2：7参照）。

記録者が何を言わんとしたかは定かではありませんが、二人がどうしようもなく貧しかったことは確かです。子供が生まれた後、二人は清めのために定められた子羊の

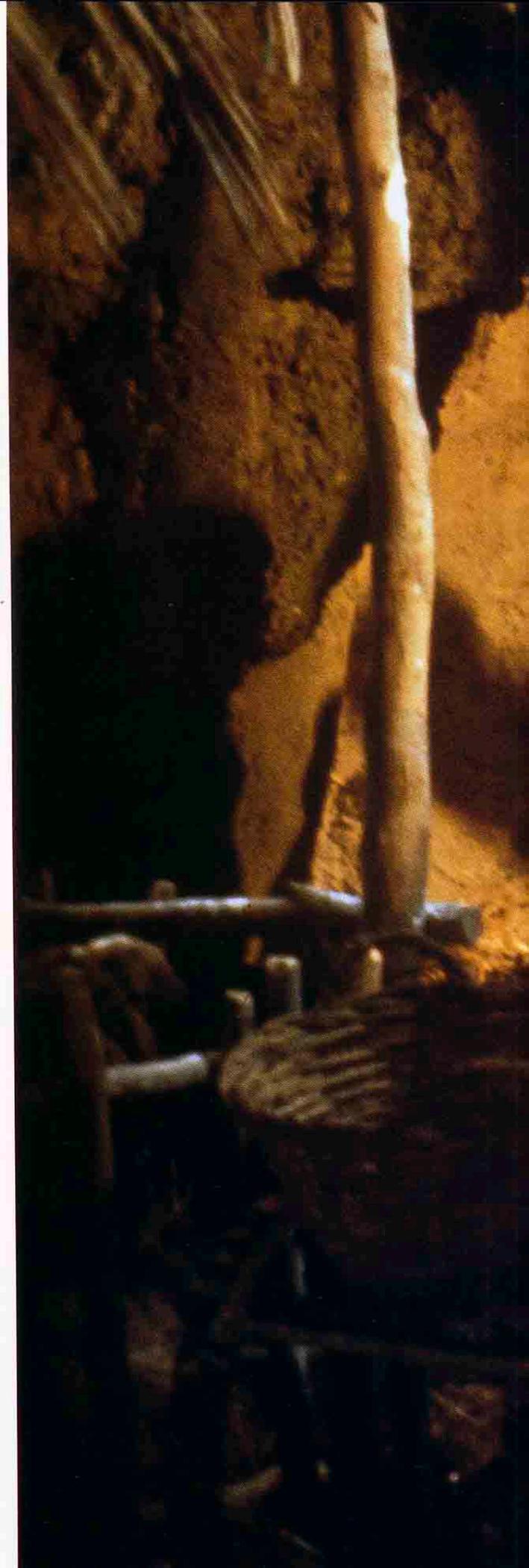
代わりに、山鳩をささげました。これは主がモーセの律法の中で、非常に貧しい人々の負担を和らげるために許された、代用のささげ物でした（レビ12：8参照）。

後に博士たちが贈り物を携えて来て、この出来事は豪華さと豊かさを加えます。しかしここで着目すべきは、彼らのはるかかなた、恐らくペルシャから、少なくとも数百キロの道のりをはるばるやって来たという点です。星が現れるよりずっと以前に出発していたのでないかぎり、イエスが誕生した晩に到着したとは考えられません。実際マタイは、彼らが到着した時点でイエスは「幼な子」（マタイ2：11。訳注——欽定訳ではこの箇所とルカ2：11、16では、それぞれ“young child〔幼児〕”と“babe〔乳児〕”に書き分けられている）になっており、一家は「家」に住んでいたと記しています。

これは、クリスマスの季節にわたしたちが心に留めなければならぬ大切な事柄を、教えてくれます。贈り物を買ったり、作ったり、包んだり、家を飾ったりすること、そうした贈り物をするきっかけとなった幼子（とその誕生）のほんとうの意味を考える、もっと静かで個人的な時間とを、多少なりとも、区別して考える必要があるのではないのでしょうか。

黄金、乳香、没薬もつやくがつつましやかに贈られ、感謝をもって受納されました。わたしたちの贈り物もまた、毎年、いや、いつでも、そうであるべきです。妻と子供たちはよく知っているのですが、わたしほど贈り物をあげたりもらったりすることに、そわそわする人はいないでしょう。しかし、だからこそわたしも皆さんと同様に、ツリーの飾りも包み紙もこの世のぜいたく品もなかった夜の、飾りけのないあの場面や、その貧しさを思い出す必要があるのです。わたしたちが信じ、愛するただ一人の神聖で質素な御方——ベツレヘムの幼子——だけに心を向けるとき、贈り物をするのがなぜふさわしいのかが分かるでしょう。

わたし自身父親として、よくヨセフについて考えます。彼は強く、物静かで、ほとんど無名の人でしたが、この地上のだれよりも、生ける神の御子を導き育てる父親にふさわしい人だったに違いないはずです。イエスに労働を教えるため、すべての男性の中から選ばれたのがヨセ







初め羊飼いたちはイエスの降誕を天の御使いから示されて「非常に恐れた。」しかし「大きな喜び」を耳にして喜んだ彼らは、「幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてある」のを目にし、記録によれば人々に伝える最初の証人となった（ルカ2：8—16参照）。

のこの静かな勇気に涙したに違いないでしょう。神の御子をこの世に迎えるために、人知れず二人だけで人々との交わりから離れ、馬屋として使われていた、たくさんの動物でいっぱい洞穴に、入って行かなければなりませんでした。

がらくたや糞を片付けながら、ヨセフの胸にはどんな思いが去来したでしょう。急いでなるべく清潔そうなわらを探し、動物たちを後ろへやりながら、自分の頬に涙が伝うのを感じたのではないのでしょうか。そしてこう思ったのではないのでしょうか。「子供が生まれるというのに、これより不健康で、不衛生で、みすばらしい場所があるだろうか。ここが王にふさわしい場所と言えるだろうか。神の御子の母は、このように不潔で見知らぬ場所で、『死の陰の谷』（詩篇23：4）を歩まなければならないのか。彼女が少しでも安らかであるように願うのは、間違っているのか。神の御子がここでお生まれになるのはほんとうに正しいのだろうか。」

しかしきっと、ヨセフはつぶやかず、マリヤも嘆き悲しまなかったことでしょう。二人はすべてをよく理解し、できる限りの努力をしたのです。

恐らくこの両親は、そのときすでに知っていたのでしょう。自分たちに授かる幼子が、この世で過ごす初めの時から終わりの時に至るまで、全人類の苦しみや悲しみの下に身を落とすようになることを。それは彼が、恵まれない境涯に生を受けたと感じる人々のことをも、助けられるようになるためでした。

わたしはマリヤについても思い巡らしました。彼女はこの世のすべての女性の中でだれよりも主に喜ばれた女性であり、幼くして天使の訪れを受け、彼女自身の人生のみならず人類の歴史をも変えることになる、言葉を授けられました。「恵まれた女よ、おめでとう、主があなたと共におられます。」（ルカ1：28）それに対する彼女の答えには、生来の霊性と備えの深さ、そして純粋さ、成熟さが表れています。「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように。」（ルカ1：38）

自分の体に生命が宿ったことを知るとき、その命が体

フでした。イエスに律法の書を教えたのもヨセフです。大工の仕事を離れて、イエスが自分が何者であるかを理解し、最終的にどのような者となるか悟り始める手助けをしたのもヨセフでした。

初めての息子が生まれたとき、わたしはブリガム・ヤング大学の学生で、ちょうど大学院での最初の1年を終えようとしている時期でした。ヨセフとマリヤほどではなかったですが、とても貧乏でした。妻もわたしも学校に通いながら働き、それに加えて大学構外の集合住宅で管理人として働いて、部屋代の足しにしました。わたしたちはバッテリーが半分いかれた小さなフォルクスワーゲンに乗っていました。新しい車もバッテリーも、買う余裕がなかったからです。

そんな状況の中でも、特別な夜が来ようとしていることに気づいたわたしは、世間的にも恥ずかしくないように、将来を犠牲にしても、妻に清潔なシーツがあてがわれ、消毒された器具が使用され、注意深く親切な看護婦、熟練した医師によって、わたしたちの初めての息子が取り上げられるようにしたいと思いました。もしも妻あるいは子供が最高の私立医療センターで特別な治療を必要とするなら、自分の命をなげうってでも、それを与えてやろうとしたと思います。

自分のこのような気持ち（この後に生まれたほかの子供たちにも、同様の思いを抱きました）と、友も親戚も近くになく、助けの手を差し伸べてくれる人もいないまま、見知らぬ町を旅して行ったヨセフが感じただろう気持ちを比べてみました。出産を間近に控えた最も苦しくつらい時期、マリヤはガリラヤのナザレからユダヤのベツレヘムまでのおよそ160キロの道のりを、動物の背に揺られて、もしくは歩いて、旅しました。ヨセフは妻

内で育ち始めるのを感じる時、そしてその子供を出産するとき、母親はどんな思いを抱くのかを思うと、わたしは言葉が出ません。いずれのときも父親がそばにいて見守ってくれるでしょうが、母親は何かを感じ、その気持ちを決して忘れることはないでしょう。わたしは再び、ベツレヘムのあの聖なる夜について、ルカが注意深く記した言葉を思い出します。

「マリヤは月が満ちて、  
初子を産み、布にくるんで、<sup>かいば</sup>飼葉おけの中に寝かせた。」(ルカ2：6—7)

ここにおいて、マリヤは初子に次ぐ主役であり、まさに合法的な女王であり、母の中の母であり、この最も劇的な場面の中心を占めています。愛する夫を除いては、彼女の傍らに添う者もなく、初子を産むこと、布にくるむこと、そしてかいばおけの中に寝かせることすべてを、彼女自身がたった一人で行ったのでした。

このうら若い女性が初めての出産をするに当たって、彼女自身子供の立場としては、自分の母親、おば、姉妹、あるいは友達に、お産の間そばにいてくれたらと願ったのではないかと思います。このような特別な幼子の誕生ともなれば、ユダヤ中の産婆の関心と介助が与えられてしかるべきところです。わたしたちのだれもが、だれかが彼女の手を握り、額を冷やし、そして苦しみした後でさっぱりとした清潔な敷布で休ませてくれたなら、という思いを持つでしょう。

しかし、実際はそのようなことはありませんでした。不慣れなヨセフの助けだけを頼みに、マリヤは一人で初子を産み、そのために出産を意識してはるばる持って来た産着の布にくるみ、そして恐らく、わらの布団の上に置いたのです。

そして幕の両側で天の軍勢が賛美の歌を高らかに歌いました。「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように。」

(ルカ2：14) しかしその場所には、天の御使い以外には、ヨセフ、マリヤ、そしてイエスと名付けられる幼子の3人がいただけでした。

人類の歴史の中心を成すこの瞬間、まさにこの目的のために天に現れた新しい星にその場所は照らし出されて

いましたが、恐らく立ち合う者は、ほかにだれもいなかったでしょう。居合わせたのは、若く貧しい大工と、母となった美しいおとめと、そして目撃した出来事の神聖さを口で言い表すべを知らない、静かな馬屋の動物たちだけでした。

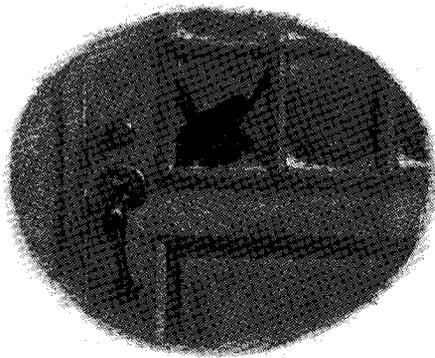
しばらくして羊飼いが訪れ、後には博士たちが東方からやって来ます。しかし最初から、そして永遠に、小さな家族がいるだけで、彼らにはおもちゃもツリーも飾りもなく、ただ幼子がいるだけでした。それがクリスマスの始まりでした。

わたしたちは、この幼子のために声高らかに賛美の声を上げるべきです。「天には栄え <sup>あめ</sup>み神にあれや <sup>つち</sup>地には安き <sup>あめ</sup>人にあれやと <sup>あめ</sup>み使いたちの <sup>あめ</sup>たたうる歌を聞きてもろびと <sup>あめ</sup>共に喜び <sup>あめ</sup>今生れましし <sup>あめ</sup>君をたたえよ。」(『賛美歌』123番)

恐らくイエスは、その誕生、そのときに受けた贈り物、また御自分の幼年期を思い出され、そして恐らく、日の栄えにふさわしい者となるには純粹さ、信仰、真の謙遜さが求められることを思って、愛する幼子たちの目をじっと見詰めながら、幾度となく次のように語られたはずです。「心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう。」(マタイ18：3)

だからこそ、クリスマスは子供たちのためにあり、そしてすべての年代の人のためにもあるのです。わたしの好きなクリスマスキャロルが子供の歌であるのも、そのためかもしれません。わたしはこの歌を歌うとき、ほかのどんな曲にも増して心がいっぱいになります。

「天を降りし神の御子は  
かいばおけに休みたもう……  
小さきイエスよ、夜明けまで  
われらのもとに休みたまえ……  
イエス、われらの手を取りて  
永遠なる道を示したまえ  
やさし愛もて恵みそそぎ  
連れ行きたまえ天の家に」  
(『賛美歌』120番) □



クリスマスを4日後に控え、家族のだれもが心の高まりを感じていました。ハイジは忙しげに母親への幾つもの贈り物を包み、エリンは、きらきらと窓に映るツリーの光にうっとり見とれていました。わたしもうきうきしていました。その夜、夫ジョンの務める会社が社員一同を妻同伴でディナーショーに招待してくれていたのです。

娘たちをベビーシッターに預け、ジョンとわたしは車を走らせました。会社のパーティーに向かう間、夫とともに、自分たちの享受している数々の祝福に思いをはせました。

パーティーは大盛況でした。わたしたちがガレージにたどり着いたときは、午前零時をとうに過ぎていました。家に着くと、夫は先に車を降りて、玄関のドアを開け、部屋の明かりをつけに行きました。その間、わたしは眠っている二人の娘に冬の夜風が当たらないよう毛布でくるんでいました。

突然、夫が走って戻って来て、叫びました。「盗難に遭った。」わたしはエリンを腕に抱えながら、背筋が凍りつくのを感じました。家の中を調べてみると、わたしたちが準備したクリスマスプレゼントが全部なくなっていました。泥棒は何かも奪って行ったのです。什分の一の領収書や祝福師の祝福文さえも奪い去られました。わたしたちは途方に暮れてしまいました。これからどうしたらよいのでしょうか。ふがいない気持ちでいっぱいになりました。

救い主の誕生を祝う恒例の家族行事を楽しむ代わりに、わたしたちは寒々とした空虚な気持ちと戦うことになりました。確かに贈り物はまた買うことができるでしょう。しかし、贈り物と

## クリスマスの

### 精神は

### だれにも

### 奪えません

#### デビー・フォツァー

包みに込められていた愛と思いやりははたして買い戻せるのでしょうか。

しかしわたしたちは、家族会議を開いて話し合った結果、家にとどまって静かにクリスマスを祝い、救い主降誕のお祝いに心を向けることにしました。

次の日曜日、盗難のニュースが教会の皆に広がりました。日曜日の夕方、夫とわたしが明かりを消して居間に腰かけていると、車のドアがパタンと閉まる音が聞こえました。二人ともびっくりして飛び上がってしまいました。強盗が舞い戻ったのではないかと思ったのです。すぐに玄関まで走って行きました。ドアを開けたわたしたちは、目を疑いました。

そこには、いてつく外気の中、ろうそくの火をちらちらさせて、25人ものワードの会員が立っていました。わたしたちを励まそうと、クリスマスキャロルを歌いに来てくれたのです。わたしたちは込み上げてくる涙を抑えられませんでした。

会員たちが車で去って行くころには、わたしたちの心の痛みは喜びに変わっていました。家に戻って来ると電話が鳴りました。「何かお役に立てることはありませんか」という近所の人からの電話でした。それからというもの一晩のうちに大勢の人々から同じような思いやりにあふれた電話をもらいました。こうしてわたしたち家族は、エリンの大好きな、例のきらきら輝く明かりをともし、ささやかながらクリスマスのお祝いを始めました。

その翌日はクリスマスイブでした。午前11時ごろからでしょうか。教会の会員が入れ替わり立ち替わり訪れてはプレゼントや食べ物を置いて行ってくれました。ある姉妹などはお金を置いて行ってくれましたが、何とその金額は、盗難に遭ったのと同額でした。ボーイスカウトの少年たちも訪れて、いろいろと奉仕してくれました。盗難のことを聞きつけた隣のステーキの会員たちは、サンタクロースを送ってくれました。ハイジは、目の前で起きていることが信じられない様子でした。この愛と援助の行列は深夜まで後を絶ちませんでした。

あのクリスマスイブの夜、眠りに就くわたしたちの心は、人々に対する感謝で満たされていました。皆がクリスマスの精神を模範で示し、わたしたちの必要を満たしてくれました。盗難という悪夢を、キリストの愛を満喫する機会へと変えてくれたのです。□



# 「天使たち、 これからどちらへ？」

デビー・オルリアン

**南**カリフォルニアの暖かく、緑に包まれた冬が昔から大好きでした。でもフィンランドのヘルシンキで迎えた冬は、まるで絵本の中の世界でした。地には雪が積もり、公園には松の木がそびえています。星があまりにまばゆく輝くので、手を伸ばせば天に届きそうです。「地には平和を、人に親しみ」（『賛美歌』126番参照）と、天使の歌声が聞こえてくるような気がするのです。

宣教師であるわたしは、平安に満ちた心で、同僚のペルズ姉妹とともにファーストフード・レストランの席に着きました。集会在夜の7時ごろに終わり、帰りのバスを待つ間、食事をしながら少し休むことにしたのです。

突然ドアが開いて、舞台衣装を着た20人くらいの人たちがなだれ込んで来ました。ある人はヨハネの衣装を、またある人はマリヤの衣装を身に着けています。羊飼いや、博士たち、羽を付けた天使のかっこうをしている人たちもいました。地元でのキリスト降誕劇を終えて来た人たちであることは、一目瞭然りょうぜんでした。皆、冗談を言い合ったり、笑ったりしながら、食べ物を買って席に着きました。

しばらくしてから、男の人が入って来ました。劇団員でないことは確かでした。髪は乱れ、古びたぼろぼろの服を着ていたからです。食事を受け取ってから、席を見つけようと探し歩いていました。劇団員の人たちの中に空いている席の一つを見つけ、ちょうど二人の博士たちの間に何とか入り込もうとしたとき、お盆を傾けすぎて

ソーダを床にこぼしてしまいました。

劇団員がくすくすと笑う中、彼はその席を離れてわたしたちの隣のテーブルを見つけました。ゆっくりと腰かけると、ただそこに座っているだけで、頭をうなだれ、手もとの食べ物でも、何か別のものでもなく、床だけを見詰めていました。その食事は彼にとって特別なもので、やっと買えるごちそうだったのだらうと思いました。飲み物をこぼしてしまって、きつとがっかりしていることでしょう。そんな様子を見ているだけで、わたしの心も痛みました。

「何かしなきゃ。」わたしはペルズ姉妹にささやきました。

「そういえば、ここのお店は飲み物をこぼしたときはただでついでくれるのよ。」ペルズ姉妹はそう言うと、すぐに席を立ち、売り場まで行きました。売り場まで歩いて行くペルズ姉妹の名札が、劇団の人たち皆の目に留まりました。目を丸くしている人もいました。

少しして、ペルズ姉妹は例の男性に飲み物を渡しました。店の人がぬれた床をふいでいました。男の人は飲み物を見詰め、そしてペルズ姉妹とわたしの方に目を向けました。目には涙があふれていました。



声を詰まらせ、こう言いました。「ありがとう。今とてもつらいときなんです。」

その男の人は54歳で、かつては船員として働いていたと話してくれました。今は独りで暮らしています。最近、父親を亡くしたばかりで、もう身寄りはないとのこと。そして、こう尋ねてきました。「ところで、あなたがたはどなたですか。」

「わたしたちは末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師です。イエス・キリストの福音と、キリストについてのもう一つの証、『モルモン書』<sup>あかし</sup>を人々と分かち合うためにフィンランドにきています。1冊いかがですか。」わたしはそう答えました。

彼は首を横に振り、答えました。「いや、でもありがとう。」

ベルズ姉妹がバスの到着時刻になったことに気づき、会話はそこで終わりました。バスに間に合うために、急いで店を出なければならなかったのです。立ち去るとき、劇団員の前を通り過ぎました。天使役の一人がわたしたちを不愉快そうににらみつけ、ぼつりと言いました。

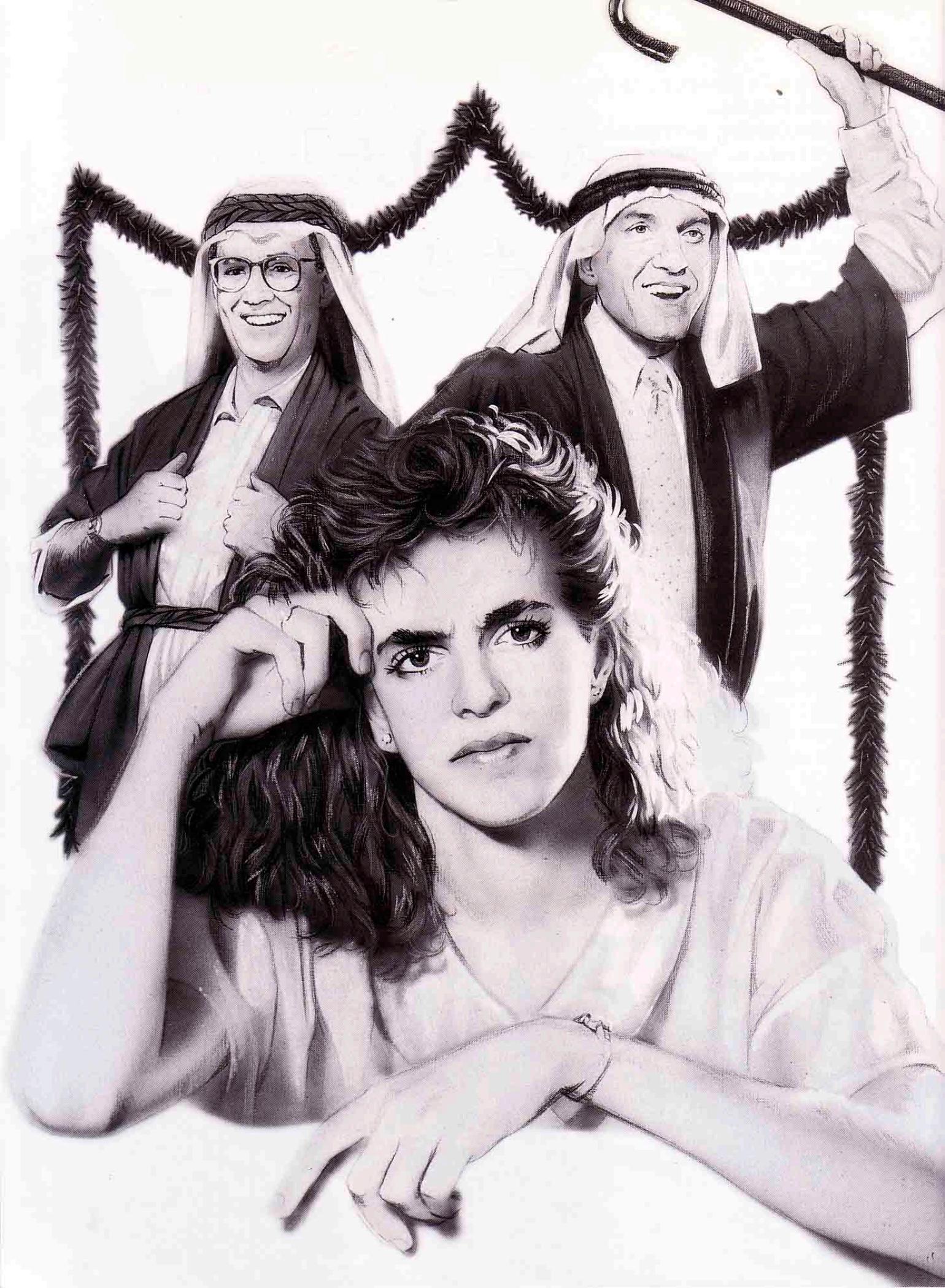
「『聖書』こそが正典さ。」一瞬驚きましたが、ベルズ姉妹とわたしはドアをそっと開けて外に出ました。すると後ろから、先ほどのぼろをまとった身寄りのない男性が近づいて来ました。

「天使たち、これからどちらへ？」その男の人が尋ね

ました。わたしたちは困惑しながら振り返り、レストランにまだいる劇団員の方を見ました。しかしどうやら、彼はわたしたちを見て言っているようです。「天使たち、これからどちらへ？」また聞いてきました。

わたしたちはほほえんで、「よいクリスマスを」と伝え、バスに乗り込みました。レストランを遠ざかるバスの中から、わたしは星を見詰めました。天国がひとときわ近く感じられた夜でした。□





# クリスマスなんて

パトリア・R・ローパー

(実際の体験に基づいた話)

「サンタクロスなんて大嫌い！」わたしは、商店街の窓に描かれた、昔ながらの妖精の楽しそうな顔をにらみつけ、大声でこう言いました。

母は、まゆをひそめてわたしを見ると、「あなたは、クリスマスの精神が何なのかよく分かっているはずよ」と言いました。

わたしは、母と一緒に車の方に急ぎながら、自分の気持ちを何とか言葉で伝えようとしました。「サンタクロスやピカピカの飾り物、それからあれやこれやのクリスマス騒ぎ、もううんざりなのよ。」そう言って、買い物袋を車のトランクに入れました。「この時期って、救い主の誕生を祝うんじゃないの？」

「同感よ。クリスマスがあまりにも商業化されすぎているのは確かね」と母は言いました。

車は、市役所の前を通り過ぎました。困っている人々のために、クリスマスの寄付を呼びかけるポスターが目にとまりました。「あれだってそうよ。クリスマスの度に罪の意識を持って、お古を全部かき集めては寄付する、そういうのって大嫌い。どうして一年中気前よくなれないのかしら。人をばかにしてるんじゃないの？」つい口走ってしまいました。

母は笑ってこう言いました。「クリスマスは、善い行いを始めるためのきっかけなのよ。」

母が何と言おうと、わたしは気にも留めませんでした。やがて、わたしはすべての人々に対して怒りを感じるようになり、家に着くころには、クリスマスの季節だからといって普段と違う振る舞いは絶対すまいと決心していました。世の中の人のように、偽善者にはなるまいと決めたのです。そして、救い主の誕生については、4月になったら祝うことにしました。

夕食が終わって、テーブルの上を片付けると、座って冬休みの宿題に取りかかりました。「ねえ、この数学の

問題どうやって解いたらいいの」と弟のトムが言いました。

「わたしだって宿題があるのよ」とわたしはどなりました。

「いいじゃないか、クリスマスなんだから」と弟は頼み込んできます。「まあ、クリスマスだと、断っちゃいけないの」と思いました。それで弟に、こう言ってやりました。「クリスマスだからって関係ないわ、暇な人に頼みなさいよ。」

「祝福の必要なひねくれ者のだれかさんをお願いするのはだめ？」とトムは言い返してきました。

「もうよしなさい、二人とも。」母が厳しい声で話を遮りました。「もう十分でしょ。わたしが見てあげるわ。トム、お姉さんは今年のクリスマスに嫌な思いを抱えているの。」

わたしは、宿題になかなか集中できませんでした。自分の中の醜い部分が、だんだんと大きくなってきていたからです。時間とともに気分が晴れるどころか、どうしてどんどん悪くなっていくのか分かりませんでした。でも、「わたしは、世界中で飢え苦しんでいる人がいるのに幸せぶっているような偽善者なんかじゃないんだから」と自分に言い聞かせました。

ちょうどそのとき、玄関のベルが鳴りました。母はわたしの方を見て、それから静かにドアの方へと歩いて行きました。そして、「まあっ」という母の驚きの声に、わたしも含め、家族全員が玄関に駆け寄りました。

そこに立っていたのは、羊飼いの衣装を身にまとった、わたしたちのホームティーチャーでした。二人は家族全員が集まるまで待っていてくれました。羊飼いのうちの一人がこう言いました。「わたしたちは、ベツレヘムへ行く途中ですが、皆さんの家にも立ち寄って、何が起こったのかお伝えしようと思いました。実は、わたした

ちが羊の群れの番をしていると、突然一人の天使が現れました。最初はとても怖かったのですが、天使はこう言いました。「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。

きょうダビデの町に、あなたがたのために救主<sup>すくいぬし</sup>が生まれになった。このかたこそ主なるキリストである。』(ルカ2:10-11)」

二人のメッセージには、簡潔で誠意を感じさせる何かがあり、わたしは深い感銘を受けました。わたしの唇が震えだしました。すぐに唇をかんで、気持ちの高まりを抑えました。それから何も聞こえなくなりました。わたしは、自分がどれほどひどい振る舞いをしてきたか、次々に思い起こしました。事の起こりは、偽善者になりたくないという思いからでした。しかし周囲の人々がどれほど悪い状態にあるのか不平を漏らしておきながら、自分をより善い人間に変えようとはしていませんでした。少なくとも、わたしの批判していた人々は、この時期にあって、寛容で優しい心を備えていました。でも、わたしは違いました。

「わたしたちは、この輝かしい出来事を見に行くんですよ」もう一人の羊飼いがそう言いました。それから二人のホームティーチャーは、夜の闇<sup>やみ</sup>に消えて行きました。わたしたちは黙ったまま、彼らのすばらしいメッセージ

について思い巡らしました。

目を覚まされる思いでした。彼らは、その奇跡的な出来事をほかの人々と分かち合い、だれもが真のクリスマスの精神を感じられるように働いていたのです。

わたしは涙をぬぐい、せき払いをしました。「わたしにも自分なりのクリスマスのメッセージができたわ。」そう言うとなわたしは、母の方に向き直り、力いっぱい母を抱き締めました。「お母さん、今までいろいろ嫌な思いをさせてごめんね。」

母は笑って、「これも多分母親の仕事のうちよ」と言いました。

わたしが、トムの方を見ると、勝ち誇ったようににやにやと笑っていました。

「いちばんしたくないことだけど、あなたには謝らなくっちゃね、トム」と切り出しました。「でも、もしそうしなかったら、今晚わたしの心は改まったわ、と言ってもあなたは信じないでしょうからね。」トムは、肩をすくめるとわたしの前を通り過ぎました。わたしは、弟が耳を赤くしているのに気づきました。照れている証拠です。

わたしは、弟の後について、台所のテーブルに座り、こう尋ねました。「トム、あなたの数学の問題、手伝わせてもらうわ。」□



# 「さらにきよくなお努めん」

(『賛美歌』74番参照)

「聖なる装いをして主を拝め。」(歴代上16:29)

**福**音はわたしたちに「イスラエルの聖者」(2ニーフアイ25:29) 救い主に従い、主に近づこうと努めるように教えています。今年のテーマとして採り上げてきた、祈りにも似た賛美歌「さらにきよくなお努めん」(『賛美歌』74番)の歌詞は、「さらに聖く」になりたいというわたしたちの願いで始まり、終わっています。

聖さは救い主の贖いにより与えられた神聖な賜物です。わたしたちが主と交わした聖約を守り、罪を悔い改めるときに、主の贖いの力により聖霊がわたしたちの生活を導いてくださいます。

## キリストに近づくための 献身的な努力が聖さを生み出す

聖くなるには、(悔い改め)や(自制心)、(犠牲)が必要です。また、絶えず献身的な努力を惜みず、一度に一つずつ正しい思いや行いを身に付けていかなくてはなりません。さらに、生活を変えらるほど強いキリストへの信仰が必要です。

ゴードン・B・ヒンクレー大管長は、以前このような質問を受けました。

「あなたがたの宗教の象徴は一体どのようなものなのでしょうか。」大管長はこう答えました。「主御自身は、何を象徴とすべきかについて、次のようにおっしゃっています。

『もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。』(ヨハネ14:15)……わたしたちは、……生けるキリスト、生ける神の永遠の御子へのあかし証を、各自の生き方を通して宣言しなければならないのです。」「聖

徒の道』1995年4月号、pp. 4, 7)

世界中の教会員はキリストのような生活を送ろうと努力しています。その一人が、ドーリー・ントローブーという名の年輩の姉妹です。ドーリーは1984年に南アフリカのソウェトで教会に入り、それ以来、主の召しを忠実に果たしてきました。また、自分の家に何十人もの孤児を迎え、自分の子供と一緒に多くの孤児を育てました。

ドーリーは息子が大学を卒業すると、息子の車を入れるガレージを家のそばに建てました。しかし、そのガレージは別の目的のために使われることになりました。1980年代には、ソウェトには礼拝堂がなく、人々は大変な思いをして、バプテスマを受けるためにヨハネスブルクまで行かなくてはなりません。そこで、神権指導者から許可をもらい、ドーリーと彼女の息子はガレージにバプテスマフォントを作ったのです。支部の多くの会員はそこでバプテスマを受けました。

今日、ドーリーは南アフリカのヨハ

ネスブルク神殿で神殿宣教師として働いています。彼女が毎日人々に示す信仰と愛は多くの人の人生を祝福しています。そして、主も彼女を祝福していらっしゃる。

## 「聖地に立つ」主の弟子

主の弟子は聖地に立ち、動いてはならないと、主は言われました(教義と聖約45:32参照)。聖地の一つは神殿ですが、聖地はほかにもあります。ボイド・K・バックー長老はこのように述べています。「礼拝堂やステーキの集会所、神殿は、教会の中で最も神聖な場所である家庭と、教会の中で最も神聖な人間関係である家族を築くために役立つとき、神聖なものとなる。」(That All May Be Edified『すべてがともに教化され』pp.234-235)

わたしたちの家庭に聖霊の聖い導きを求めるならば、わたしたちの家を祈りと断食、信仰と学問、栄光と秩序の家にしなければなりません(教義と聖約88:119参照)。わたしたちは不完全ゆえに苦勞することもあります。わたしたちの家庭と心の中心にキリストを置くことができます。親切な心でほかの人に手を差し伸べ、わたしたちの霊を養い、神に目を向けながら生活し、そのようにしてだんだんと「主のごとくに尊く」なることができるのです。

- 聖さはどのような報いをもたらしますか。
- わたしたちの家庭を聖いところにするには、どうしたらよいでしょう。□





# 敵が彼の友となった

ジョセフ・スミスはその愛のゆえに、  
しばしば敵からも尊敬と助けを受けた

デュアン・C・ノールズ



わたしたちの多くは、御霊<sup>みなたま</sup>の力によって不信仰な人々が偏見を捨て、平和の福音のすばらしさを知るようになった様々な出来事を、目にしています。心と理性が開かれ、神の息子、娘がキリストに従う道を選んだのです。

預言者ジョセフ・スミスが出会った人々の中には、彼の証<sup>あかし</sup>に感動して回復された福音を受け入れ、彼を主の預言者として受け入れた人々が数多くいます。その証と相まって、キリストのような人格と影響力は、敵意を抱いていた人々の怒りを和らげたり、逆に味方したりするようなことさえあったのです。

預言者ジョセフ・スミスの生涯から採り上げた以下の様々な例は、パーリー・P・プラット長老の言葉をよく裏づけています。プラット長老はこう言いました。「〔ジョセフの〕最も非情な敵でさえ、彼の言葉に耳を傾けさえすれば、圧倒されてしまうのが普通だった。」<sup>1</sup>

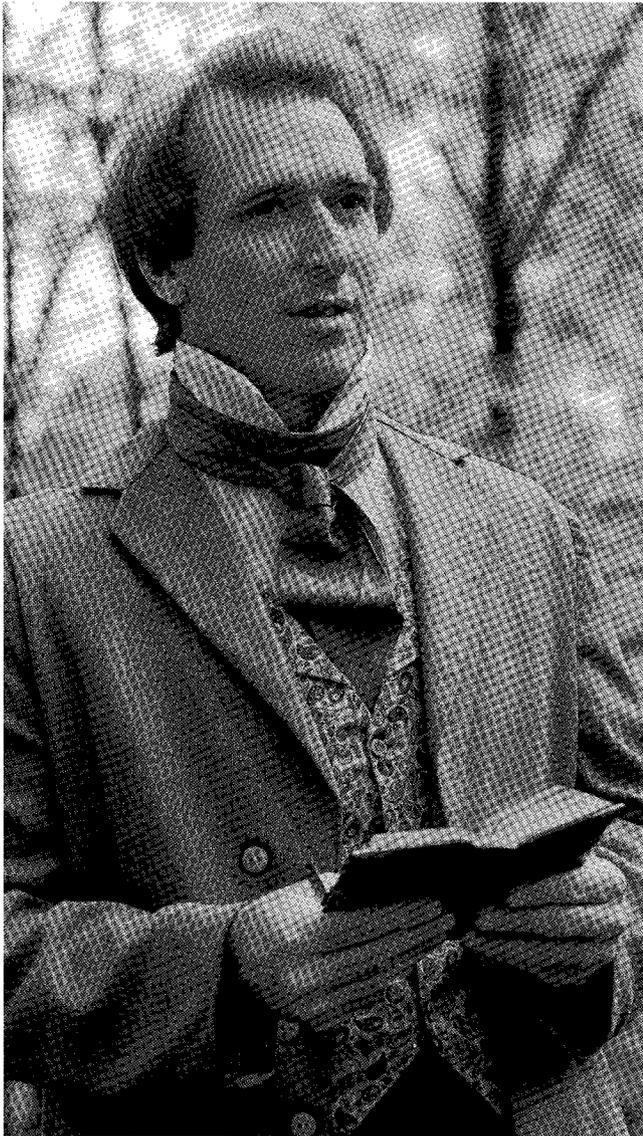
左——1838年10月に預言者ジョセフ・スミスは裏切りにより役人の手に引き渡された。無実の罪による投獄だったが、4か月にわたる獄中生活の中で、ジョセフ・スミスは敵と友になり、彼らの間を自由に歩き回った（写真は教会制作の映画より）。

## ジョセフに味方した法の番人

1830年6月に預言者は人々に教えを説き、バプテスマを施すためにニューヨーク州コーズビルへ行きました。そこへ到着すると、その地域の信徒たちが自分たちの友人の幾人かに、バプテスマを受ける備えをさせていました。バプテスマの後、その日の夕べに新たに教会員となった人々のために一つの集会が予定されていました。決められた時刻に人々が集まり始めたころ、ジョセフは「治安びん乱と、『モルモン書』についての説教をして郡内で騒乱を起こした罪で」逮捕されました。しかしその巡査は預言者を知るようになってから、心の変化を体験しました。

「その巡査はわたしが逮捕されて間もなく、逮捕状を出した人々が、待ち伏せをしている暴徒たちの手に、わたしを渡そうと計画していることを知らせてくれた。し

上——ジョセフ・スミスが両親の家に行ったときに、武装した男たちが彼を逮捕しにやって来た。母親が彼らを息子に会わせると、ジョセフは笑みを浮かべ、進み出て彼らと握手した。ジョセフの親しみのこもった態度に接して、男たちは彼が犯罪者でも偽善者でもないことを確信した。



あるイギリス人の改宗者は、ジョセフ・スミスの最後の説教のときに、もとは暴君だったと思われる男が感動して、二度とモルモンと戦うようなことはしないと語った様子を記録で伝えている。

かし彼は、わたしがそれまで聞かされてきたような種類の人間ではないということを知って、彼らからわたしを救い出そうと決心していた。』<sup>2</sup>

その巡査には四人を裁判所まで移送する責任がありましたが、暴徒の手から預言者を守るという約束を守りました。待ち伏せしていた者たちは町外れでその巡査が御する移送用の荷車を取り囲みました。しかし、彼らがジョセフ・スミスを襲撃する前に、巡査はそのたくらみ

の裏をかき、馬に鞭<sup>むち</sup>を入れてその場を通り過ぎてしまったのです。

その夜、二人はとある宿屋に泊まりました。巡査はジョセフをベッドに寝かせ、自分は足をドアに当て、銃を抱えるようにして寝ました。ジョセフの言葉によると、その巡査は「もし不法な攻撃がなされるようなことがあれば、わたしのために戦い、全力を尽くして守ると断言して」<sup>3</sup> いたのです。

翌日ジョセフは無罪放免となり、二人は友人として別れました。

### 兵士を動かす

1834年の春に、ミズーリ州の人々からジャクソン郡の家を追われ、困窮し切っていた聖徒たちを救うために、シオンの陣営として知られる約200人の長老たちが、オハイオ州カートランドから1,400キロ以上の道のりを行軍しました。ミズーリ州の暴徒たちはその救援軍を攻撃しようとしたが、激しい雹<sup>ひょう</sup>に襲われてその計画は頓挫<sup>とんざ</sup>してしまいました。

2日後、雹の猛威に遭って打ち沈んでいた暴徒たちの指導者スコンス大佐とその一団は、シオンの陣営の人々に会って、彼らの真意を知らされました。ジョセフ・スミスは次のように話しています。

「わたしは立ち上がって彼らに向かい、ジャクソン郡の聖徒たちの苦しみ、またわたしたちが受けている迫害について大体のことを話した……。まただれに対しても……害を加える意志はなく、苦境にある同胞<sup>どうぱ</sup>に助けを与えたいと考えているだけであること、自分たちについて飛び交っている悪いうわさは偽りであり、わたしたちを滅ぼそうとする敵のたくらみによるものであることを話した。わたしが長い話を終えたときには、彼らの心は和らげられ、同情の念を起こしていた。彼らは立ち上がってわたしに手を差し出し、至る所に広がる聖徒たちへの悪感情を静めるために尽力しようと話した。そして、わたしたちが受けている苦しみと迫害について聞き、わたしたちの目的がよいものであることを知って涙を流した。この後、彼らは人々の中へ出て行って、興奮した人々を静めるために、根気よく努力してくれた。』<sup>4</sup>

このような経緯があったにもかかわらず4年後には、聖徒たちのミズーリ州追放をせき立てる事件が起きてし

まいりました。それはある選挙の投票日であった1838年8月6日にデービス郡の郡庁所在地ガラティンで起きた出来事でした。聖徒には投票を認めないという話から、乱闘事件が起きたのです。死者はなく、ジョセフ・スミスがその現場にいなかったにもかかわらず、投票所で7人を殺害したと彼を告発するうわさがたちまち広がっていききました。

数日後、ジョセフが両親の家に行ったとき、一団の武装した男たちがやって来ました。8人の士官が入って来て、ジョセフの母と話しているときに、「ジョー・スミスとすべてのモルモン」を必ず殺すと言いました。彼女はその殺人があったと伝えられている時機にジョセフはデービス郡にいなかったことを話し、こう言いました。「それに、息子を見たら、彼を殺そうなどとは思わなくなりますよ。」

さらに続けてこう言いました。「『皆さん、ぜひ預言者ジョセフ・スミスがどういう人間かを知ってください。』彼らは恐ろしいものを見るかのように、ジョセフ・スミスを観察しました。ジョセフは笑みを浮かべ、前に進み出て一人一人と握手をしました。その様子で彼らはジョセフが犯罪者でも偽善者でもないことを得心させられました。

それからジョセフは腰をかけて、教会の……考えとそれまでに歩んで来た道、設立以来、敵から受けてきた仕打ちについて説明しました。彼はさらに、教会のだれかが法を破るようなことがあれば、苦しむ人が出ないうちに、法の裁きを受けなければならないと言いました。このようにして彼らとしばらく話してから、彼は『お母さん、もう家に帰らないと……エマが待っているの』と言いました。すると二人の男が躍り上がるようにして立ち、絶対に一人で行ってはいけない、危険だから自分たちが護衛して一緒に行くと強い調子で言いました。

結局3人が一緒に行きました。そして彼らが戻って来るまでの間、わたしはドアのところに残った士官たちの話を立ち聞きしていました。

1番目の士官。『おまえ、スミスと握手したときに変な感じがしなかったか。今まであんな気持ちを感じたことは一度もなかったよ。』

2番目の士官。『おれは動けなかったよ。あの人の髪の毛一本たりとも傷つけるつもりはない。』

3番目の士官。『ジョセフ・スミスや「モルモン」を

殺すために来るなんてことは、もう絶対はないよ。』

1番目の士官。『ここに来るのはこれが最後だと思う。あの「モルモン」の預言者ほど潔白で罪がない感じの人間にはお目にかかったことがない。』

2番目の士官。『彼が人を殺したという話はすべて……うそだ。そんなことがあるわけがない。まったく人騒がせなことだ、何のいわれもないことで。しかし、こんなことは二度とごめんだな、まったく。』

息子と一緒に家まで行った男たちは指揮下の民兵を解散して家に帰ると約束し、確かにそうしました。』<sup>5</sup>

### 獄中で説き教える

しかし聖徒についての偽りはその後も広がり続けました。ジョセフは1838年10月にほかの指導者とともにミズーリ州ファーウエストで裏切られ役人の手に引き渡されるまで、広まり続ける偏見と全力を尽くして戦いました。

結局、ジョセフとほかの指導者たちはミズーリ州のリッチモンドで裁判にかけられ、その後4か月リパティーの監獄に収監されたのです。そして1839年4月の初めごろ、ジョセフは別の件で裁判を受けるためにガラティンへ移送されました。獄中生活を共にしたアレクサンダー・マックレーは、ジョセフが休廷中に看守たちに身振りで親愛の情を示していたと書いています。

マックレーの記録には次のように書き続けられています。「役人たちは、看守がわたしたちととても親しくなってしまうので、彼らを信頼できなくなり、その結果思うように看守の配置ができず、頻繁に看守の顔ぶれを変えていた。わたしたちは判事や弁護士などと同席し、また看守からは最高の待遇を受け、柔らかな寝具を与えられた。幾度も味わった獄中生活でこれほど良い扱いを受けたことはなかった。』<sup>6</sup>

この囚人たちの弁護士だったピーター・H・バーネットは次のように書いている。「〔ジョセフ〕はほかの人々に対して大きな影響力を持っていた……リパティーへ戻るために出発する直前、わたしは彼が外で人々に囲まれ、一人一人と話し、まったくくつろいだ様子でいるのを見た。5日というそのわずかな間に、彼は敵の心を和らげようとそうように努め、護衛がなくても何の危険もない状態で彼らの中に行くことができるようになった。』<sup>7</sup>



ジョセフ・スミス（中央。教会制作の映画より）はカーセージの監獄でも力強く教えを説いた。幾人かの看守はジョセフたちが偽りの告発によって投獄されたことを知り、家に帰った。

ガラティンでの審理の後で、この弁護士（明らかに囚人たちの無実を信じていた）はジョセフとその同僚たちに逃亡の機会を与えました。そして彼らはこの好機を得て、州境を越え、イリノイ州へ逃げ込みました。<sup>8</sup>

それから5年後、殉教する9日前の1844年6月18日、暴徒たちが立ち騒ぐ状況の中で、ジョセフは最後の公開説教をしました。イギリスの改宗者チャールズ・ランバートがその聴衆の中に見たと書いている男が、もとは暴徒だったが、すでに悔い改めていた人物だったということは十分にあり得ることです。

「預言者が最後の説教をしたとき、わたしはその場にいた……。それは力強い説教だった。わたしの後ろに背の高い男が一人涙を流しながら立っていた。振り返って彼を見ると、絶対にモルモンと戦うようなことはしない、どんなことがあってもしないと話した。わたしがまったく知らない人だった。」<sup>9</sup>

1844年6月24日までに、ジョセフ・スミスは反逆罪のどがで自分を訴追しようとする司法官のもとに自ら出頭

しました。その日ジョセフとその一行は馬でカーセージへ向かいました。ジョセフたちがカーセージの監獄で看守たちに教えを説いたことはよく知られていますが、その看守たちの幾人かがそれにどう反応したかはあまり知られていません。現場に居合わせた教会員ダン・ジョーンズはこう書いています。

「わたしたちの中の幾人かがかわるがわる看守たちに教えを説いていた……そして何人かは看守の任を解かれた。囚人たちの無実を信じていることを認めたために、看守として不適任とされたからである。彼らは暴徒たちの様々な話を聞かされ、その影響を受けていたということをよく話した……。彼らは、暴徒の攻撃はジョセフ・スミスに復讐するための偽りだったことを認める程度までに、わたしたちの証を信じた。……そして彼らが『この人たちと争うことはないのだから、家に帰ろう』と言うのを何度も耳にした。」<sup>10</sup>

殉教の2日後、ジョーンズ兄弟はノーブーの家で棺に横たえられたジョセフとハイラムの告別式に出席しました。彼は後に、「疑いなく地上で最も賢く徳高い人」をそのときに見たと書き、さらにこう続けています。「わたしは少し前に、彼らが鉄格子越しに自分たちを殺したがつている者たちに平和の福音を優しく説き教えている姿を見ていた。」<sup>11</sup>もしジョセフが暗殺者たちの耳目を集め、その偉大な精神と親愛の情を伝えることができたなら、彼らの幾人かがやはり心を和らげたことは疑いありません。

## 悪に対して善をなす

激しい迫害と不法行為の標的となった、神から選ばれた回復の預言者はまさしく「あなたがたの敵を愛し、あなたがたをのろう者を祝福し、あなたがたを憎む者に善をなし、あなたがたを不当に扱い迫害する者のために祈りなさい。こうして天におられるあなたがたの父の子となるためである」(3ニーファイ12:44-45)という、救い主の勧告を体現していると言えます。

しかしジョセフは御霊の導きによって柔らかな言葉を用いるという以上のことをして、敵に愛と哀れみ<sup>あはれ</sup>を示しました。悪意に満ちた二人の迫害者に対する彼の親切な応対は、その一例です。

1843年6月にジョセフはノーブーで、ミズーリ州知事の命令を受けたレイノルズとウィルソンという二人の警官に逮捕されました。二人はジョセフをはじめとする囚人たちに対してひどい扱い方をしました。ピストルでジョセフのわき腹を打ったり、殺すと脅したり、またわざと家族の目につくところで彼を連行したりしました。

しかし間もなくこの二人はジョセフやほかの教会員を殺すと脅したかどで裁判を受けるためノーブーに連れ戻され、立場は逆転してしまいました。ジョセフは自分が無事に戻れたことを祝って宴<sup>うたげ</sup>を設けましたが、その客の中にはレイノルズとウィルソンも含まれていました。<sup>12</sup> その日の午後、ノーブー市民に向けた話の中でジョセフはレイノルズとウィルソンについて触れました。

「わたしはこの二人をノーブーに連れて来て、疎遠を余儀なくされていたこの町に引き渡しました。しかし鎖につながれた囚人としてではありません。親切な行為につながれた囚人としてです。わたしはこれまでこの二人に優しく接してきました。わたしには善をもって悪に報いる特権があります。彼らはわたしを不法に連行し、ひどい扱い方をし、わたしの権利を奪おうとしました。もし主の手がなければ、わたしは彼らにミズーリへ連行され、殺されていたことでしょう。しかし今彼らはわたしの手中にあります。わたしは二人を自分の家に連れて行き、上席に着かせ、わが家ができる限りの接待をしました。わたしが連行されたとき、妻は彼らによってわたしの姿を見ることも許されませんでした。その妻が二人の給仕をしました。」<sup>13</sup>

あるときロレンゾ・スノー大管長が、伝道の旅に出発

しようとしていた宣教師たちにこう勧告しました。「相手がどのような人でも、必ずその心を動かす方法があります。そして、人々の心を動かすその方法を見つけるのが皆さんの仕事なのです。」<sup>14</sup> アグリッパ王の前に立った使徒パウロ(使徒26章参照)やラモーナイ王の前に立ったアンモン(アルマ20:8-28参照)と同じように、預言者ジョセフは、たとえ敵であっても、相手が自分の言葉に耳を傾けさえするならばその心を動かしてしまう、すばらしい賜物を持っていました。

その賜物は預言者としてのジョセフの偉大さを強く示す数ある個人的特質の一つであり、わたしたちも主の導きがあれば達成できるということを思い起こさせてくれます。□

## 注

1. *Autography of Parley P. Pratt* 「パーリー・P・プラット自叙伝」p.46
2. *History of the Church* 「教会歴史」1:88
3. 同上1:89
4. 同上2:106
5. *History of Joseph Smith by His Mother, Lucy Mack Smith* 「母ルーシー・マック・スミスが語るジョセフ・スミスの生涯」pp.254-256
6. 「教会歴史」3:259
7. ビーター・H・バーネット, *An Old California Pioneer* 「カリフォルニアの初期開拓者」p.40
8. 「教会歴史」3:320-321, 脚注参照
9. ハイラム・L・アンドラス, ヘレン・メイ・アンドラス共著, *They Knew the Prophet* 「預言者を知る人々」p.172
10. この引用はダン・ジョーンズ著, "The Martyrdom of Joseph Smith and Hyrum Smith" *Brigham Young Universithies Studies* 「ジョセフ・スミスとハイラム・スミスの殉教」(「ブリガム・ヤング大学紀要」24 [1984年冬期]:99), "The Martyrdom of Joseph Smith and His Brother, Hyrum" 「ジョセフ・スミスとその兄弟ハイラムの殉教」(同上, 24 [1984年冬期]:88) を基にしたものである。
11. ジョーンズ 「ジョセフ・スミスとその兄弟ハイラムの殉教」p.94
12. 「教会歴史」5:440-456, 460
13. 同上5:467
14. *Improvement Era* 「インブループメント・エラ」1899年12月号, p.128

# イエスの 誕生

クリスマスが来る度に、世界中の子供たちが、救い主の誕生の物語を敬虔な気持ちで再現しています。今月号では、エルサレム支部の子供たちに登場してもらい、聖句で物語をたどってみました。ここに紹介する写真には、ベツレヘム近郊の羊飼いの野原、ユダヤの荒れ野、王宮を守る要塞ヘロディオンなどが収められています。

「六か月目に、御使ガブリエルが、神からつかわされて、ナザレというガリラヤの町の一処女のもとにきた。

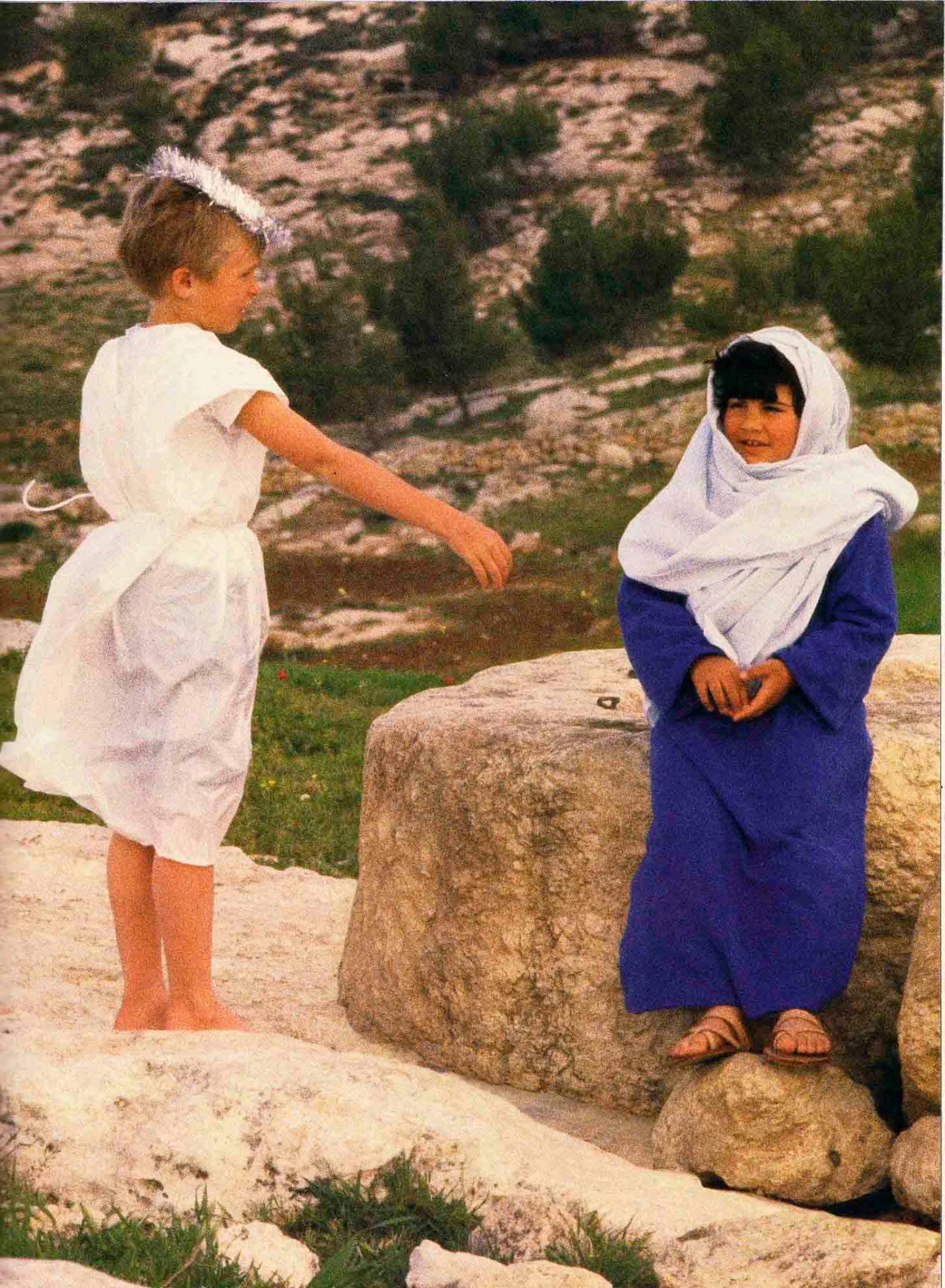
この処女はダビデ家の出であるヨセフという人のいいなづけになっていて、名をマリヤといった。

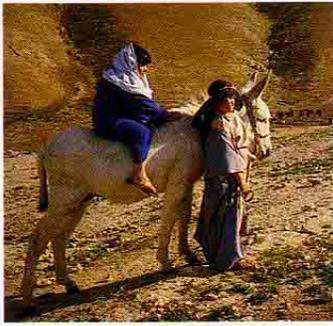
御使がマリヤのところに来て言った、『恵まれた女よ、おめでとう、主があなたと共におられます。』

この言葉にマリヤはひどく胸騒ぎがして、このあいさつはなんの事であろうかと、思いめぐらしていた。

すると御使が言った、『恐れるな、マリヤよ、あなたは神から恵みをいただいているのです。

見よ、あなたはみごもって男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい。』(ルカ 1:26-31)





「そのころ、全世界の人口調査をせよとの勅令が、皇帝アウグストから出た。

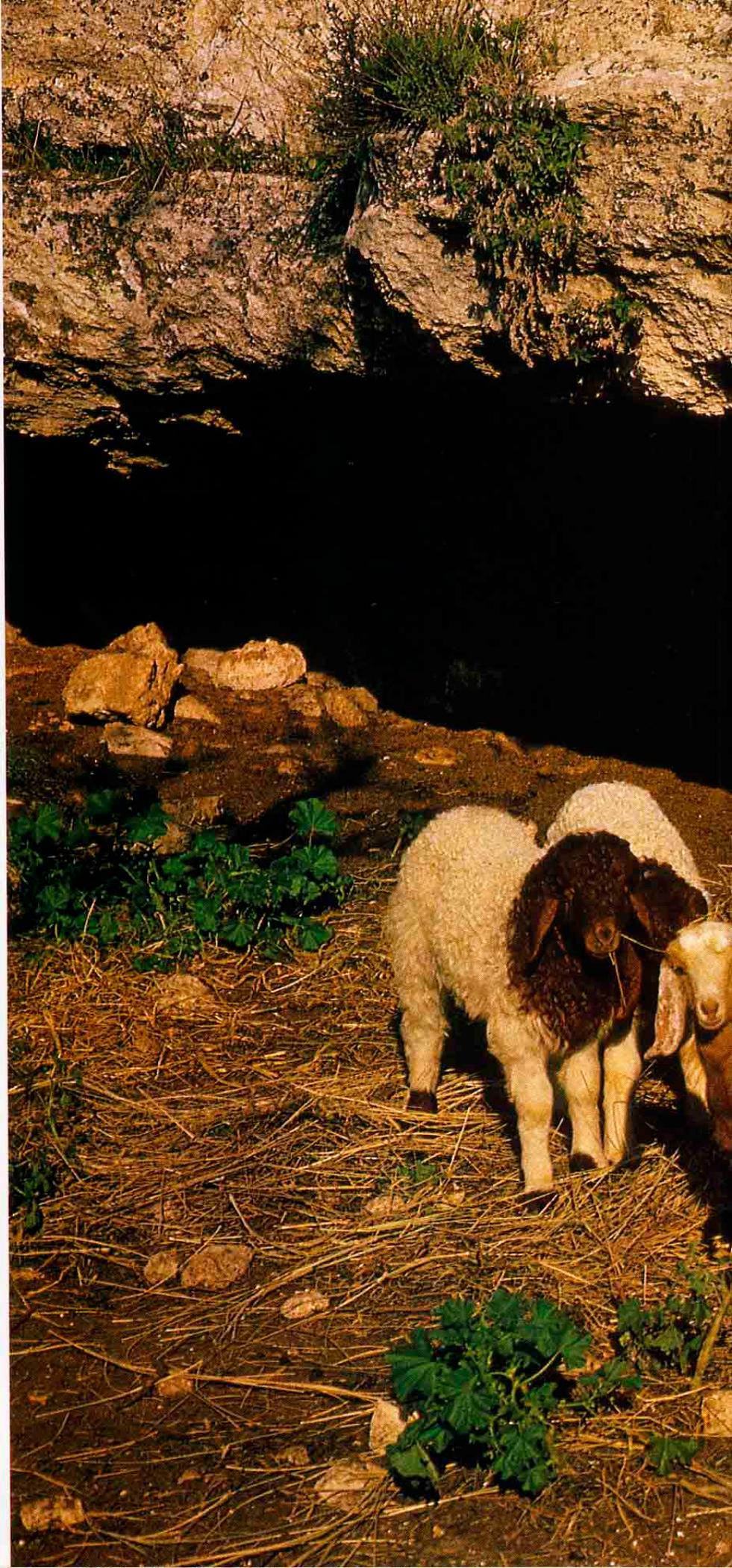
これは、クレニオがシリアの総督であった時に行われた最初の人口調査であった。

人々はみな登録をするために、それぞれ自分の町へ帰って行った。

ヨセフもダビデの家系であり、またその血統であったので、ガリラヤの町ナザレを出て、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。

それは、すでに身重になっていたいいなづけの妻マリヤと共に、登録をするためであった。」  
(ルカ2：1-5)

「ところが、彼らがベツレヘムに滞在している間に、マリヤは月が満ちて、  
初子を産み、布にくるんで、  
飼葉おけの中に寝かせた。客間には彼らのいる余地がなかったからである。」  
(ルカ2：6-7)









「さて、この地方で羊飼<sup>ひつじかい</sup>たちが夜、野宿しながら羊の群れの番をしていた。

すると主の御使<sup>みつかい</sup>が現れ、主の栄光が彼らをめぐり照したので、彼らは非常に恐れた。

御使は言った、『恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。

きょうダビデの町に、あなたがたのために救主<sup>すくいぬし</sup>がお生<sup>うま</sup>れになった。このかたこそ主なるキリストである。

あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉<sup>かいば</sup>おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである。』

するとたちまち、おびただしい天の軍勢が現れ、御使と一緒に神をさんびして言った、

『いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和がある

ように。』(ルカ2:8-14)

「御使たちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼たちは『さあ、ベツレヘムへ行って、主がお知らせ下さったその出来事<sup>たがひ</sup>を見てこようではないか』と、互に語り合った。

そして急いで行って、マリヤとヨセフ、また飼葉おけに寝かしてある幼な子を捜しあてた。

彼らに会った上で、この子について自分たちに告げ知らされた事を、人々に伝えた。

人々はみな、羊飼たちが話してくれたことを聞いて、不思議に思った。

しかし、マリヤはこれらの事をことごとく心に留めて、思いめぐらしていた。

羊飼たちは、見聞きしたことが何もかも自分たちに語られたとおりであったので、神をあがめ、またさんびしながら帰って行った。(ルカ2:15-20)





「イエスがヘロデ王の代に、ユダヤのベツレヘムでお生れになったとき、見よ、東からきた博士たちがエルサレムに着いて言った、

『ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みにきました。』

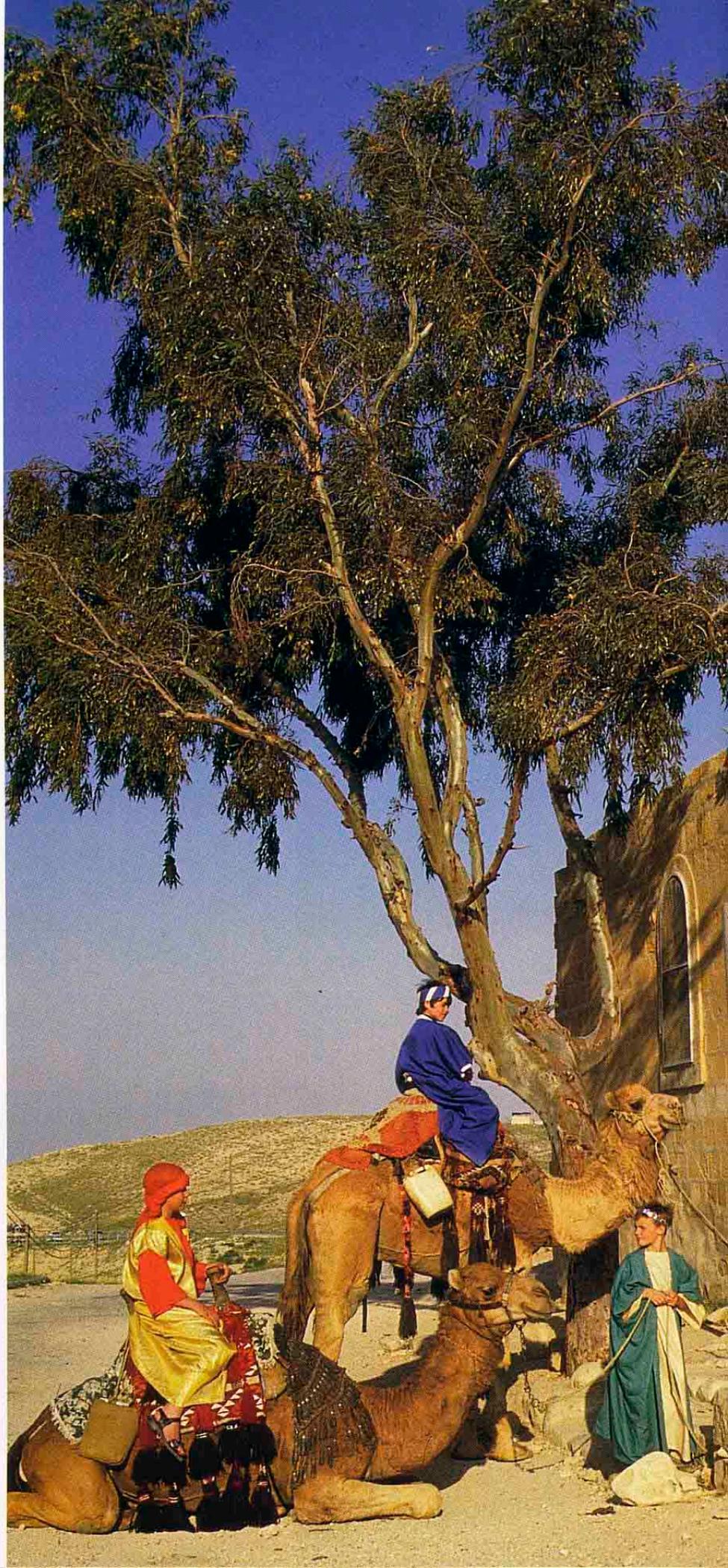
ヘロデ王はこのことを聞いて不安を感じた。エルサレムの人々もみな、同様であった。

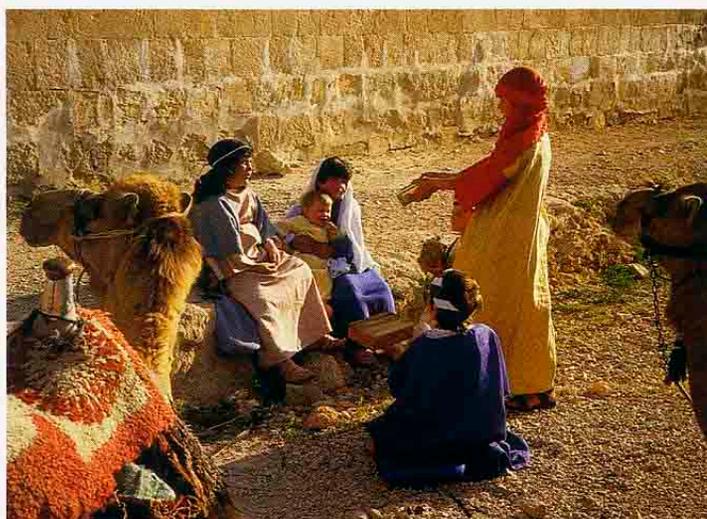
そこで王は祭司長たちと民の津法学者たちとを全部集めて、キリストはどこに生れるのかと、彼らに聞いた。だした。

彼らは王に言った、『それはユダヤのベツレヘムです。……』

そこで、ヘロデはひそかに博士たちを呼んで、星の現れた時について詳しく聞き、

彼らをベツレヘムにつかわして言った、『行って、その幼な子のことを詳しく調べ、見つかったらわたしに知らせてくれ。わたしも拝みに行くから。』(マタイ2:1-8)





「彼らは王の言うことを聞いて出かけると、見よ、彼らが東方で見た星が、彼らより先に進んで、幼な子のいる所まで行き、その上にとどまった。

彼らはその星を見て、非常な喜びにあふれた。

そして、家には行って、母マリヤのそばにいる幼な子に会い、ひれ伏して拝み、また、宝の箱をあけて、黄金・乳香・没薬もつやくなどの贈り物をささげた。

そして、夢でヘロデのところに帰るなどのみ告げを受けたので、他の道をとおって自分の国へ帰って行った。」(マタイ2:9-12) □



子供時代の思い出を語るのに、わにやさめや海へびを話題にするのは奇妙に思われるかもしれませんが。しかし、ドミンゴス・リアオが育ったオーストラリアのダーウィンでは、それが日常生活の一部だったのです。

ドミンゴスは友達と一緒に、淡水と海水の混じったラピッドクリークの河口まで、よく自転車で出かけたものでした。

流れに乗って漂うくらげを避けながら水をかき分けて歩いて行くときは、海から迷い込んださめや、泥に隠れたわに、毒のある海へび、そしてとげに毒を持つストーンフィッシュ（訳注——オニオコゼ科）に気をつけなければなりませんでした。そんな危険にもかかわらず、繰り返し川を渡ったのは、川向こうにあるものにそれだけの魅力があったからです。

「約束の地だったんです」と、ドミンゴスは回想します。「魚はバケツに何杯だつたとれるし、浜辺は荒れてなくて、きれいなままでした。だれも知らない緑の草原もありました。」



人生の川は、ドミンゴスを少年時代に遊んだオーストラリアの入り江から遠く離れた地に導いた。その過程で、彼はしばしば流れに逆らって泳がなければならなかった。

## 過ぎ去った日々

今では、その川に橋がかかっています。広い原っぱは、ジョギング道路が縦横に走る公園に変わり、大学生がよくやって来ます。それでもドミンゴスは、今も川にやって来て、思い出にふけりながらいろいろ考えるのが好きです。

まだ若いドミンゴスの人生は、思い出でいっぱいなのです。思い出の始まりはオーストラリアの北、数百マイルに位置するティモール島です。中国人の両親は、そのポルトガル植民地で働いていました（ドミンゴスというのはポルトガル名）。インドネシアが押し寄せて来たとき、男性はポルトガルに逃げ、女子供はオーストラリアに脱出しました。「逃げ切れたのは2隻のボートだけでしたが、ぼくと母と数人の親類は、そのうちの1隻に乗っていたのです。生存できたのは幸運でした」と、ドミンゴスは説明します。

父は後にダーウィンで家族に合流しました。勤勉に働いたおかげで、家族は裕福になりました。ほかに二人男の

# ドミンゴス・リアオの日々

リチャード・M・ロムニー

子が生まれ、家族に加わりました。ドミンゴスは英語を学び、スポーツに熱中しました。クリケット、空手、テニス、サッカー、ハンドボールそしてバレーボールです。学校では成績優秀で、音楽と美術も得意でした。また、おじのレストランでアルバイトをしていました。

### 信仰の日々

ある日、バプテスマを受けたばかりの末日聖徒のおばが、家族を宣教師に紹介しました。それから間もなく、リアオ家族は改宗しました。「わたしたちは1年ばかり活発に集っていました」と、ドミンゴスは言います。「その後両親は教会に行かなくなりました。わたしはしばらく一人で教会に行っていました。日曜日にクリケットをするようになりました。でも、教会に行くように、いつも良心の促しを感じていました。」

メルボルンに住んでいたドミンゴスの祖父が脳卒中で倒れたのは、ちょうどそんな時期でした。生存は悲観視されていました。当時16歳だったドミンゴスは、祈るように強い御霊の促しを感じました。「もし祖父に生きるチャンスを与えてくださったなら、教会に一生をささげると天のお父様に約束した

のです。でも、祖父が元気になるまで待つことはしませんでした。家に帰ると、直ちに教会に戻りました。約束したことは実行するように教えられていたからです。」

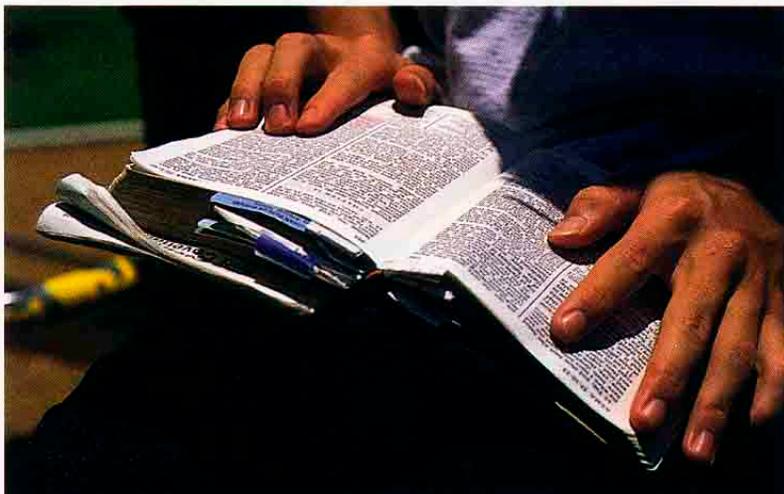
確かに、祖父は回復しました。そしてそのころには、ドミンゴスは単に約束を守るためだけではなく、そうすることが正しいと信じたために、教会に通うようになっていたのです。

### 苦しみの日々

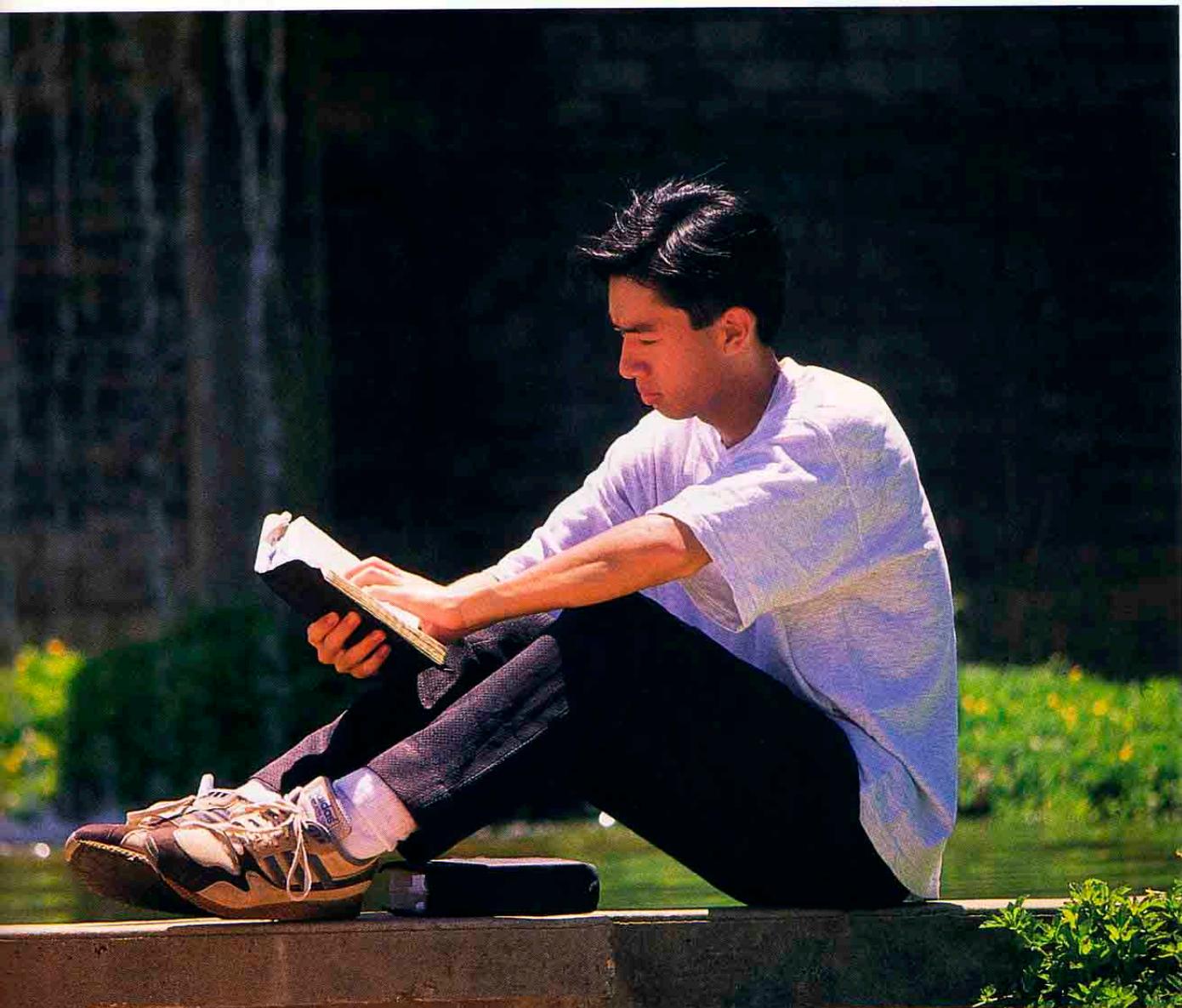
ドミンゴスが18歳になったとき、父親は教会活動に反対するようになりました。

「父は、セミナリーが学業のじゃまだと考え、朝早く起きてセミナリーに行くことを禁止したのです。わたしは父を敬う気持ちから、セミナリーに行くことをやめました。でも、セミナリーの勉強は家で続けました。すると、父はそれも禁止したので、やめざるを得ませんでした。」

それに、聖文を読んでいるのを見る度に、父はわたしが宿題をしていないと思い込みました。実際、成績は良かったんですけどね。あるときなど、父は聖典をわしづかみにしてくずかごに捨ててしまったこともありました。わたしにとって、2年間読んで印を付



家族の反対にめげず、ドミンゴスは伝道のために自分を備えた。時には一日中聖文を読むこともあった。「聖文は平安をもたらし、自分が何をすべきなのか思い出させてくれました。」



けた、とても貴重な聖典でした。翌朝、無事に取り戻すことができましたが、それからは支部長に保管してもらわなければなりませんでした。」

間もなく、ドミンゴスの父親は教会に関係のあることをすべて禁じるようになりました。聖文の学習も、ミューチャルの活動も、ホームティーチングも、そしてとうとう日曜日の集会さえ禁止されてしまったのです。

「わたしは18歳になっていましたから、法的には大人だったわけですが、わたしが最初に考えたのは、従うことでした。ほんとうです。自分の父親な

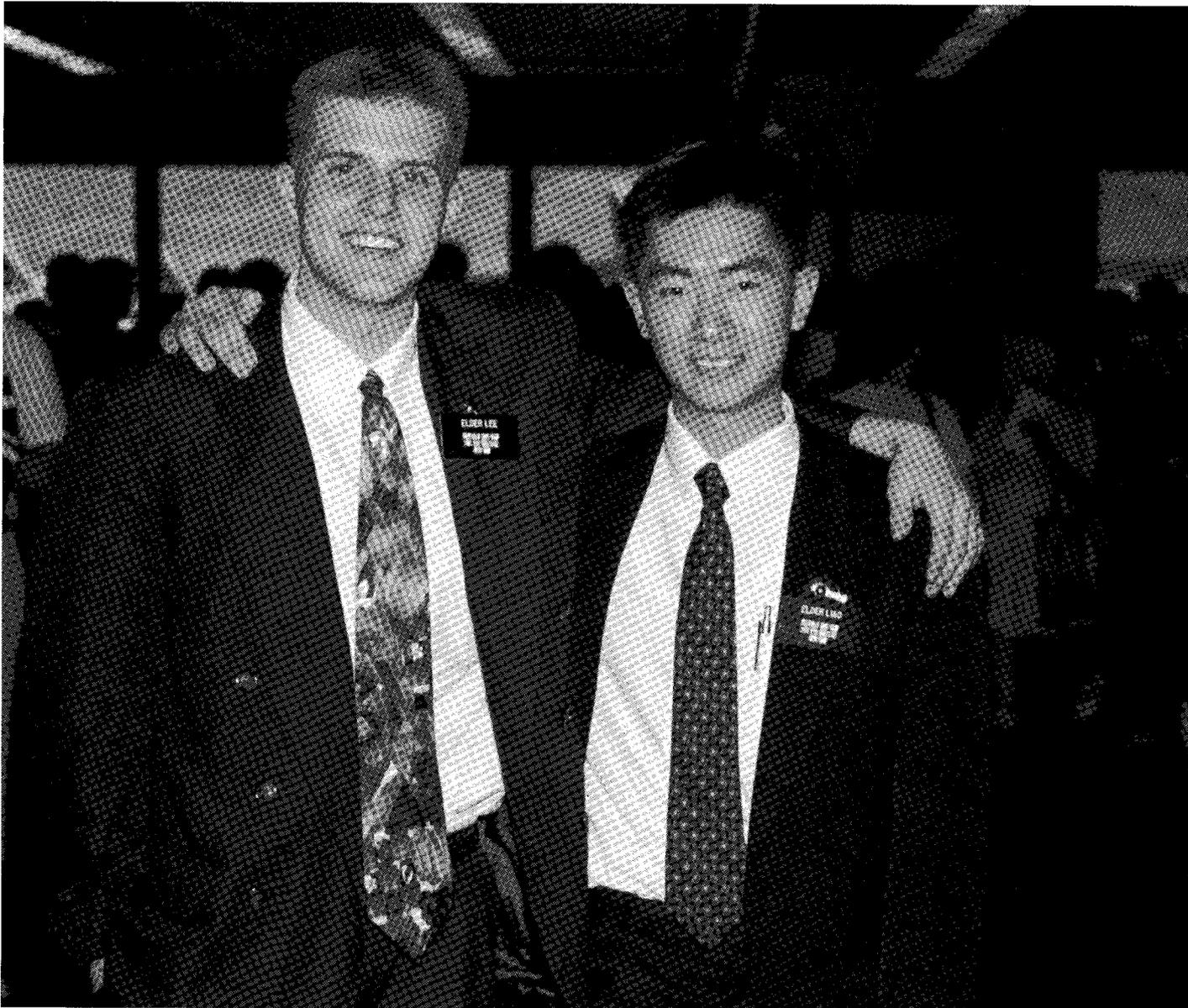
のだから、従いたいと思うのが当然でしょう。しかし、教会に通うという、天の御父との約束を破ることはできないことは承知していました。

父から、次の日の日曜日に教会に行くのなら、家には二度と帰る必要はないと言われ渡されました。それでわたしは荷物をまとめました。その夜、わたしは心から祈りました。翌朝、身支度を整えたわたしを見て、父はカンカンに怒りました。」

ドミンゴスは家を出ましたが、両親は教会に探しにやって来ました。そこで3人は話し合い、隔週なら教会に出

席してもよいことになったのです。「喜ばしい解決法ではありませんでしたが、まったく出席できないよりはましだと思いました」と、ドミンゴスは言います。

ある日、教会に行く準備をしていたときです。また父が、教会に行ったら家には入れないと言いだしました。「2度目は1日目同様、いや、もっとひどかったです。わたしは祝福師の祝福を受けられる日を長い間待っていました。1年に1度だけ来る祝福師が、遠路はるばる来てくれる日だったので。約束の時間に教会に行くと、ちょう



どやって来た父と鉢合わせしてしまいました。家に帰らざるを得ませんでした。祝福を受ける機会を失ったのです。」

父が3度目に同じように彼の前に立ちただかったとき、ドミンゴスは家を出て祖母のもとに行きました。「しばらくしてから母が来て、父はもう怒らないからとわたしを説得しました。それで家に戻ることにしました。」

#### 決意の日々

祖母と同居中、ドミンゴスは専任宣教師として伝道する望みを抱き始めま

した。「祈って受けた答えは、19歳になったら伝道に出るべきだ、という非常に確かなものでした。その日以来、心は決まりました。あと必要なのは準備だけでした。」

ノーザンテリトリ大学では、第1学年の課程を修了すれば、伝道のために2年間の休学を認めてくれることが分かりました。しかし、そのためには伝道前の数か月間は、以前に増して厳しい課程をこなさなければならないのです。「わたしの担当教官は、伝道はきっと良い経験になるからと、むしろ勧めてくれたんです」とドミンゴスは

リアオ長老は、伝道中に大きな幸福を得た。しかし、最大の喜びは、福音に対する自分の愛を家族と分かち合い、なぜあれほど多くを堪え忍んでまで宣教師になりたかったのか、理解してもらおうことだ。

言います。そして、ドミンゴスは高校時代から実行しているように、仲間の学生に悔い改めの段階や救いの計画を教え続けました。

また、聖文の学習にもいっそう熱を入れ、聖句をたくさん暗記しました。「聖文は平安をもたらし、自分が何をしたらよいか教えてくれました。」

専任宣教師たちのレッスンに同席しました。頻繁に証をしました。毎日日記もつけました。このように備えてきたドミンゴスを、教会の指導者は面接によってふさわしいと認め、宣教師推薦書を提出しました。

そしてある日、教会から帰ると、父親から家を出て行けと言われてしまいました。実に4度目のことです。「ほとんど最後通告といった感じでした。父はわたしの伝道に出る計画に腹を立てていたんです。伝道に行ったら、親子の縁を切ると言われました。」

ドミンゴスの支部長のマイケル・カンが、伝道の召しが来るまで自分の家に来るようにと伝えてくれました。

大学の学期も終わり、ドミンゴスは毎日祈りと霊的な音楽、教会の活動、そして伝道や聖文の勉強をして過ごしました。時には一日中聖文を読むこともありました。

### 喜びの日々

そしてついに待ちに待った手紙が届いたのです。「あなたを香港伝道部に

召します」という手紙です。出発前に家族と和解したいと思ったドミンゴスは、一時実家に帰りました。「家族はわたしの決意を変えられないと分かったので、譲歩してくれました。」出発前には、家族全員で食事に行き、たくさん記念写真を撮りました。

宣教師訓練センターや伝道地からの手紙には、そのとき以来の喜びあふれる出来事が述べられています。

——「わたしを教えてくれた宣教師の一人、(ホワイト) スケイブランド長老が奥さんと赤ちゃんと御両親とともに飛行場で出迎えてくれました。広東語を少しずつ学んでいます。訓練センターの人たちはすばらしいです。」

——「母から手紙を2通もらいました。家ではすべて順調です。家族はたくさん祝福を受けていますし、彼らもそれを知っているのです！ 今では、家族も親戚もわたしの伝道を喜んでくれています。確かに神は奇跡の神です！」

——「今日初めて街頭伝道をしました。道行く人たちに話しかけました。6つのレッスン全部を広東語で教えました。」

——「中国の海岸近くにあるポルトガルの植民地、マカオに転任して来ました。ここで伝道することができる宣教師は少ないので、とてもラッキーだと感じています。今一人の求道者を教えていて、彼はバプテスマを受ける予定です。神が特別な業のためにわたしを

ここに召されたことを知っています。」

——「『モルモン書』を読むためなら、どんな不都合も克服しがいがありました。安息日を守るためには、どんな侮辱も甘んじて受ける価値がありました。ひそかにひざまずいて祈るためには忍耐強く待ち続け、教会に出席するにはどんな苦痛も堪え忍ぶ価値がありました。伝道に来るために経験したどんな迫害も、悩みも、そして涙も、喜んで受けるだけの価値があったと心から思います。」

### 平安の日々

今日もリアオ長老は、マカオの宣教師アパートの窓から約束の地を眺めています。

「伝道に出ようと決心したとき、わたしを押しとどめようとする強い流れがあることは予測していました。水の中の隠れた危険がどんなものか、わたしを刺したり、飲み込んだりしようとするものが何なのか、はっきりとは分かりませんでした。それでも、わたしの頭には無事に渡り切ろうという思いしかなかったのです。今、わたしは川を渡り切って、ここにいます。そして、それが確かにそれほど価値があるものだと思っています。」

そして、ドミンゴスは家族やほかの人たちも向こう岸に渡ることができるように、橋をかけたいと切に望んでいるのです。□



**お**金はないけど時間や才能ならたっぷりある、というあなた。今年のクリスマスはきっとすてきなものになりますよ。次に挙げるリストから、皆に喜んでもらえるものを見つけてください。

#### 家族のために

- 「聖句カード」を何枚も作って、家族で使う鏡にはる。1か月に1枚だと12枚。1週間に1枚だと52枚になる。家族の好きな聖句を手で書くか、ワープロで打つ。シールをはったり色を塗ったりして、飾りつけるとよい。箱入りのセロテープを添えて、カードをラッピングする。使用説明書を必ず入れること。

- 安いカレンダーを買うか自分で作る。家族にとって大切な日、つまり誕生日、記念日、締め切り日、休暇などを、そのカレンダーに書き込む。ほかの行事を加えられるように余白を残しておく。1年間を通して家族の皆が日程や活動を調整できるように、皆の目につくところに掛けておく。

- 「何でもベストテン」をワープロで打つか、手できれいに書く。それを巻き物のように丸めてリボンで縛る。おもしろいものにしてもよいし、まじめなものでもよい。以下のような項目を設けるとよい。「お母さんやお父さん（または兄弟や姉妹）の好きなところ」「わたしが受けた親切」「楽しかった思い出」など。

- 両親に、街で外食するための「デート券」を作り、食事代を添えて渡す。食事代が高すぎるという場合は、ピクニック用の弁当を作ってあげる。両親が出かける間、ベビーシッターを引き受ける。

# 贈り物リスト

リサ・A・ジョンソン

PHOTOGRAPHY BY WELDEN ANDERSEN

●両親に好きな神殿を尋ねる。結婚した神殿かもしれないし、最寄りの神殿かもしれない。建築援助のために献金した神殿かもしれないし、参入してみたいと思っている神殿かもしれない。その神殿の写真を撮るか、絵を描く。またはその神殿の写真を『聖徒の道』などから切り抜き、額に入れる。

●きれいな便せんかカードに自分の証を書く。福音や家族の模範のおかげで、もっとキリストのようになりたいと思ったことも記すとよい。これは最高の贈り物となる。

## 友達のために

●学校が休みになる前に、クリスマスのお菓子やケーキを友達のために作って持って行く。友達が普段口にしないような特製料理のレシピを作る。友達の好物を聞き出し、それを中心にしたメニューで食事を作ってあげる。

●大きくて安価なカップを買い、友達の好きなジュースを缶ごとその中に入れる。カップの取っ手にリボンを付ける。

●「聖句の木」を作る。市販の小さな木をそのまま用いたり、木材や紙を用いたりして作る。色紙か白いカードに好きな聖句を書き、きれいな色のリボンを結んで、飾りとする。25個の聖句を用意し、12月1日からクリスマスの日まで、1日1聖句ずつ心に留めてもらう。

●クリスマスの時期、寒くて雪の多い地域であれば、「雪だるまセット」をあげる。古い帽子やマフラーなどを、古着屋で入手したり、編んだりする。目や口用の石やボタン、鼻用のにんじんも忘れないように。安価なほうきを用いるのもよい。

●『モルモン書』をプレゼントする。末日聖徒でない人には『モルモン書』に証を書いて渡す。末日聖徒には

きれいな聖典カバーをあげる。

## 宣教師のために

●軽くてかさばらない飾り物を送る。いちばんよいのは、後で食べたり、捨てたり、再利用したりできるもの。例えばクリスマス用のストッキングや、小枝で作ったツリー、ポップコーンやキャンディー、シリアルで作ったレイなど。これらは、幼い弟や妹でも簡単に楽しく作れる。壊れやすいもの、クリスマスの後、片付けが大変なものは送らない。

●薄くて丈夫な額に入った写真はよい贈り物となる。宣教師は家から写真をあまり入手できないからである。

●送り先の宣教師が国内で働いている場合、または海外で伝道している場合でも、その国の切手入手できるならば、封筒に切手をはり、あて名を書いて、封筒の色とよく合った便せんとともに送る。

●宣教師が、求道者や協力的な会員に渡せるちょっとした贈り物はいつも喜ばれる。霊的なメッセージを書いたしおりやカードなど。

## 高齢者のために

●彼らが必要としているものをあげる。活動的な人で本人が望んでいるなら、スーパキッチン（食物を無料提供する施設）や小児科の病院など、助けを必要とするところで、奉仕活動ができるよう助ける。あなたも一緒に奉仕活動をする。

●自宅の飾りつけを手伝う。必要なら手作りの飾りを提供する。そしてクリスマスが終わったら、彼らが長年大切にしてきたクリスマスにちなんだ品々をしまうのを手伝う。

●地元で開かれる無料のコンサートや催しに連れて行く。礼儀正しく快活な態度で同行すればさらに喜ばれる。

●彼らの家の掃除、庭仕事、雪かきをする。同様の奉仕を約束する「仕事券」をあげる。

●思い出の品を贈る。写真でいっぱいスクラップブックや、家族や友人から集めた記録類はとも喜ばれる。

### 来年のクリスマスのためのお願い

●皆さんの贈り物リストにわたしたち編集室あてのものには載っていないことでしょう。そこで、随分気の早いことを言いますが（今年のクリスマスさえまだ終わっていないにもかかわらず）、今から、来年のわたしたちへのクリスマスプレゼントとして考えてほしいことがあります。

来年12月号の『聖徒の道』には、世界中の10代の末日聖徒たちから寄せられた、キリストへの証<sup>あかし</sup>を掲載するつもりです。ですから、救い主への自分の証について考えてみてください。証をはぐくみ強めてくれた特別な出来事や経験はありませんか？ イエス・キリストに対する証は、困ったときどのような助けになったでしょう？

皆さんの感想や経験をつづってください。2、3段落の短いものでもかまいません。特別な気持ちになった経緯や理由を分かち合いたいのです。

1996年4月30日までに投稿してください。どの国の言葉でもけっこうです。投稿の際は、氏名、年令、住所、ステーク／地方部、ワード／支部名を明記してください。あて先は次のとおりです。

International Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, USA.

できれば、あなたの写真で返却不要なものも送ってください。□



「幼子のキリストをあがめるシメオン」(クレグ・オルソン画)

「主なるキリスト」を見るまでは死ぬことはない、聖霊によって告げられていたシメオンが神殿にいと、マリヤとヨセフが幼子イエスを伴ってやって来た。シメオンは幼子を腕に抱いて、神をほめたたえ、こう述べた。

「主よ、今こそ、あなたはみ言葉のとおり<sup>しごと</sup>にこの僕を安らかに去らせてくださいます、わたしの目が今あなたの救を見たのですから。」(ルカ 2：25-30)



「ヨ セフも……ガリラヤの町ナザレ  
 を出て、ユダヤのベツレヘムとい  
 うダビデの町へ上って行った。

それは、すでに身重になっていたいいな  
 づけの妻マリヤと共に、登録をするため  
 であった。

ところが、彼らがベツレヘムに滞在して  
 いる間に、マリヤは月が満ちて、

初子<sup>ういご</sup>を産み、布にくるんで、飼葉<sup>かいぼ</sup>おけの  
 中に寝かせた。客間には彼らのいる余地が  
 なかったからである。」（ルカ2：4－7）



# ヒンクレー大管長、イギリスのマスメディアに キリストについて証する

ゴードン・B・ヒンクレー大管長は、8月25日から10日間イギリスを訪問し、14の集会で延べ7,730人に向けて説教をした。

**地**元報道機関の代表者たちは、ヒンクレー大管長の今回の訪問を機に、BBC放送のラジオおよびテレビ、ロンドン・ニュース・ラジオ、およびリバプール新聞社とのインタビューを企画した。

8月26日(土)には「BBCラジオ4」のリポーター、スザンヌ・エバンスがメイドストーン・ステークセンターで、大管長にインタビューした。

教会の信条と教義に関するリポーターの質問に答えて、大管長はこう述べた。「わたしたちはクリスチャンです。神の御子であり、世の贖い主である主イエス・キリストの神性について、末日聖徒イエス・キリスト教会ほど強い証をもって宣言している教会はほかにありません。この教会は、イエス・キリストの御名を冠しています。そしてイエス・キリストの福音こそがわたしたちの説く福音であり、わたしたちの掲げる愛の精神こそ、わたしたちの実践しようと努めている精神なので

す。」

8月28日(月)の午後には、ハイドパークの教会堂で、ロンドン・ニュース・ラジオのローレンス・スパイサーがヒンクレー大管長にインタビューした。大管長夫妻はこの後、イギリス・ロンドン伝道部の宣教師たちとの集会に出席した。

ローレンス・スパイサーとのインタビューに先立ち、ヒンクレー大管長は同じくハイドパークの教会堂で、BBCワールドニュース・サービスのトレバー・バーンズとも会見している。トレバー・バーンズの質問の幾つかは宣教師と彼らの働きに重点を置いたものだった。例えば「イギリスの人々を改宗させるために、『うぶな若者』を派遣しておられますが、この件について再検討を要すると考えたことはおありですか」などの質問がなされた。

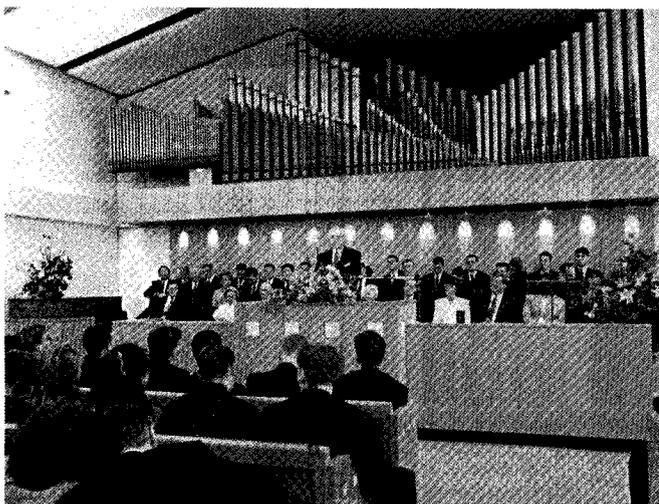
ヒンクレー大管長は若い宣教師たちに対するその表現を聞いてほほえんでいた。その後の集会では再三「うぶな若者」という表現を引き合いに出して、回復された福音の真实性を宣言するために、宣教師たちはよく備えられていることを強調した。またラジオの質問への返答の中では、テモテにあてたパ

ウロの次の言葉を引用した。「あなたは、年が若いために人に軽んじられてはならない。むしろ、言葉にも、行状にも、愛にも、信仰にも、純潔にも、信者の模範になりなさい。」(1テモテ4:12)そして、宣教師のメッセージにより、教えを受ける人の人生に祝福がもたらされるばかりでなく、若い宣教師たちも奉仕の業を通して祝福されます。こうして御言葉を教える者と聞く者が両者ともに教化されて、ともに喜びを得ていることを伝えた(ヨハネ4:36; 教義と聖約50:22参照)。

ハイドパークでの二つのインタビューの後、引き続き行われた宣教師との集会は、BBC放送のテレビスタッフによりフィルムに収録された。彼らは日曜夜の宗教ドキュメント番組「エブリマン」を担当しており、ロンドンでの伝道活動を中心に番組を構成していく予定である。このため、BBC放送のスタッフは教会の承諾を得て、2組の長老たちがロンドン市内で働いたり、日課をこなしたりする姿を数週間にわたって取材した。

プロデューサーのベン・フォックスによれば、BBCテレビ1で毎週放映される「エブリマン」はおおよそ230万人の視聴者を持ち、様々な宗教的テーマ、宗派や論点に焦点を当てている。当教会の宣教師を採り上げた番組は9月21日に放送が予定されている。ヒンクレー大管長の訪問についても、大管長夫妻が集会の後にすべての宣教師と握手している部分を含めて、番組の一部として放映されることになっている。

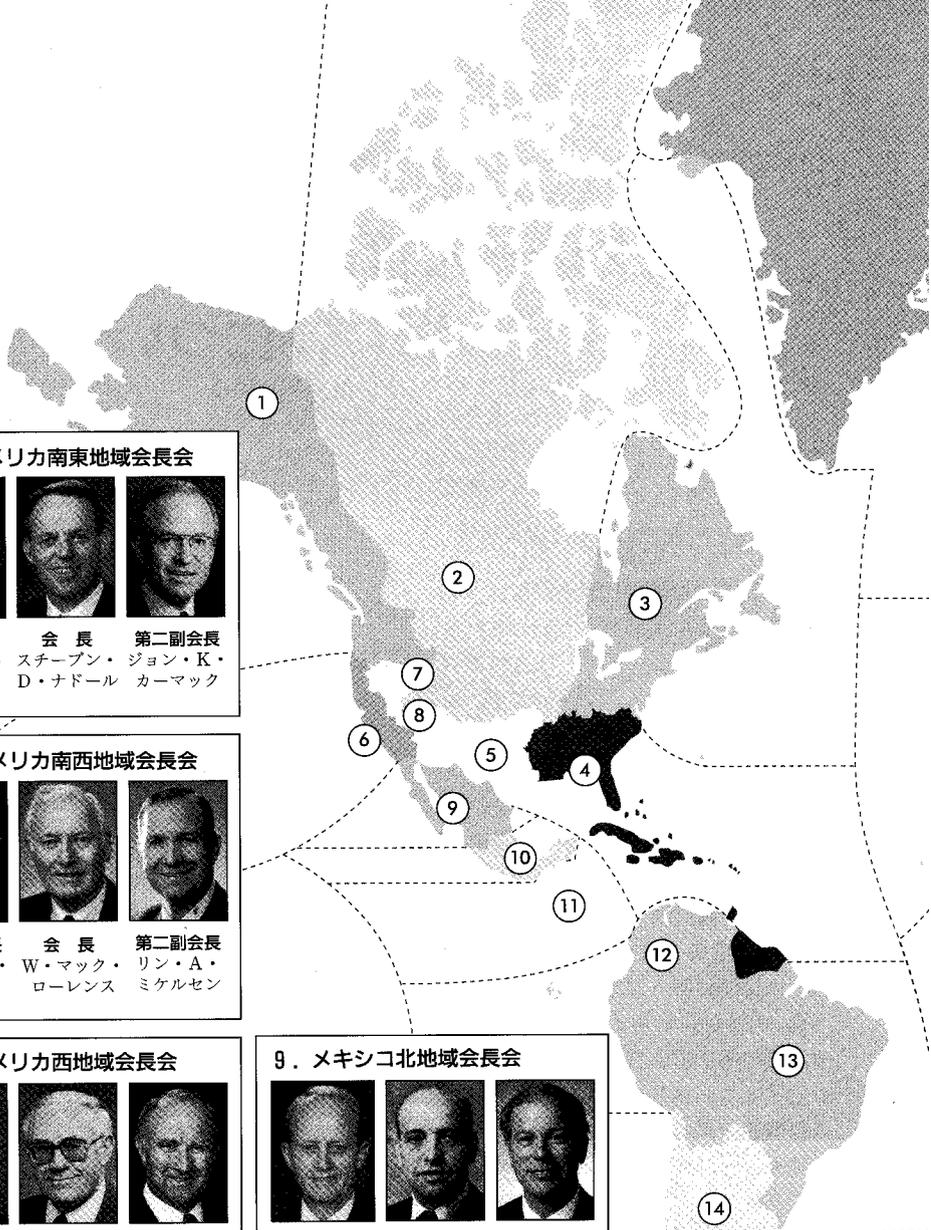
ヒンクレー大管長夫妻は、アルバート・ドックス・アンド・マーシーサイド海洋博物館を訪れた後に、今回のイギリス訪問での最後の短いインタビューを、リバプール新聞社のリポーターから受けた。(Church News『チャーチニュース』1995年9月9日付け)



8月27日に再奉獻されたハイドパークの教会堂で聖徒たちを指導するヒンクレー大管長。背後に見えるのはパイプオルガン。

# 新たに組織された 地域会長会

**最**近、大管長会は地域会長会の再編成を発表した。教会は世界を22の地理上の管理地域に分けており、どの地域会長会も七十人によって構成されている。しかし、例外的に次の3地域だけは新しく召された地域幹部が副会長として働いている。南アメリカ南、ヒューゴ・A・カトロン。北アメリカ北西、C・スコット・グロー。南アメリカ北、カール・B・プラットの各長老である。

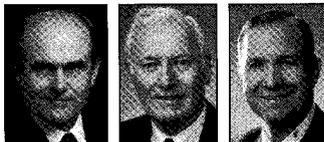


## 4. 北アメリカ南東地域会長会



第一副会長 F・バートン・ハワード  
会長 スチープン・D・ナドール  
第二副会長 ジョン・K・カーマック

## 5. 北アメリカ南西地域会長会



第一副会長 F・エンツイオ・ブッシュェ  
会長 W・マック・ローレンス  
第二副会長 リン・A・ミケルセン

## 1. 北アメリカ北西地域会長会



第一副会長 グレン・L・ペイス  
会長 スペンサー・J・コンディアー  
第二副会長 C・スコット・グロー

## 6. 北アメリカ西地域会長会



第一副会長 ランス・B・ウィックマン  
会長 ローレン・C・ダン  
第二副会長 C・マックス・コールドウェル

## 9. メキシコ北地域会長会



第一副会長 ジョン・M・マドセン  
会長 アンヘル・アブレア  
第二副会長 アンドリュー・W・ピーターソン

## 2. 北アメリカ中央地域会長会



第一副会長 ヒュー・W・ピノック  
会長 ウィリアム・R・ブラッド  
第二副会長 L・ライオネル・ケンドリック・フォード

## 7. ユタ北地域会長会



第一副会長 ロバート・E・ウエルズ  
会長 アンクサンダー・B・モリソン  
第二副会長 ロバート・K・デレンバック

## 10. メキシコ南地域会長会



第一副会長 ゲーリー・J・コールマン  
会長 D・トッド・クリストファーソン  
第二副会長 カルロス・H・アマゾー

## 3. 北アメリカ北東地域会長会



第一副会長 W・ドン・ラッド  
会長 ボーン・J・フェザーストン  
第二副会長 マーリン・K・ジェンセン

## 8. ユタ南地域会長会

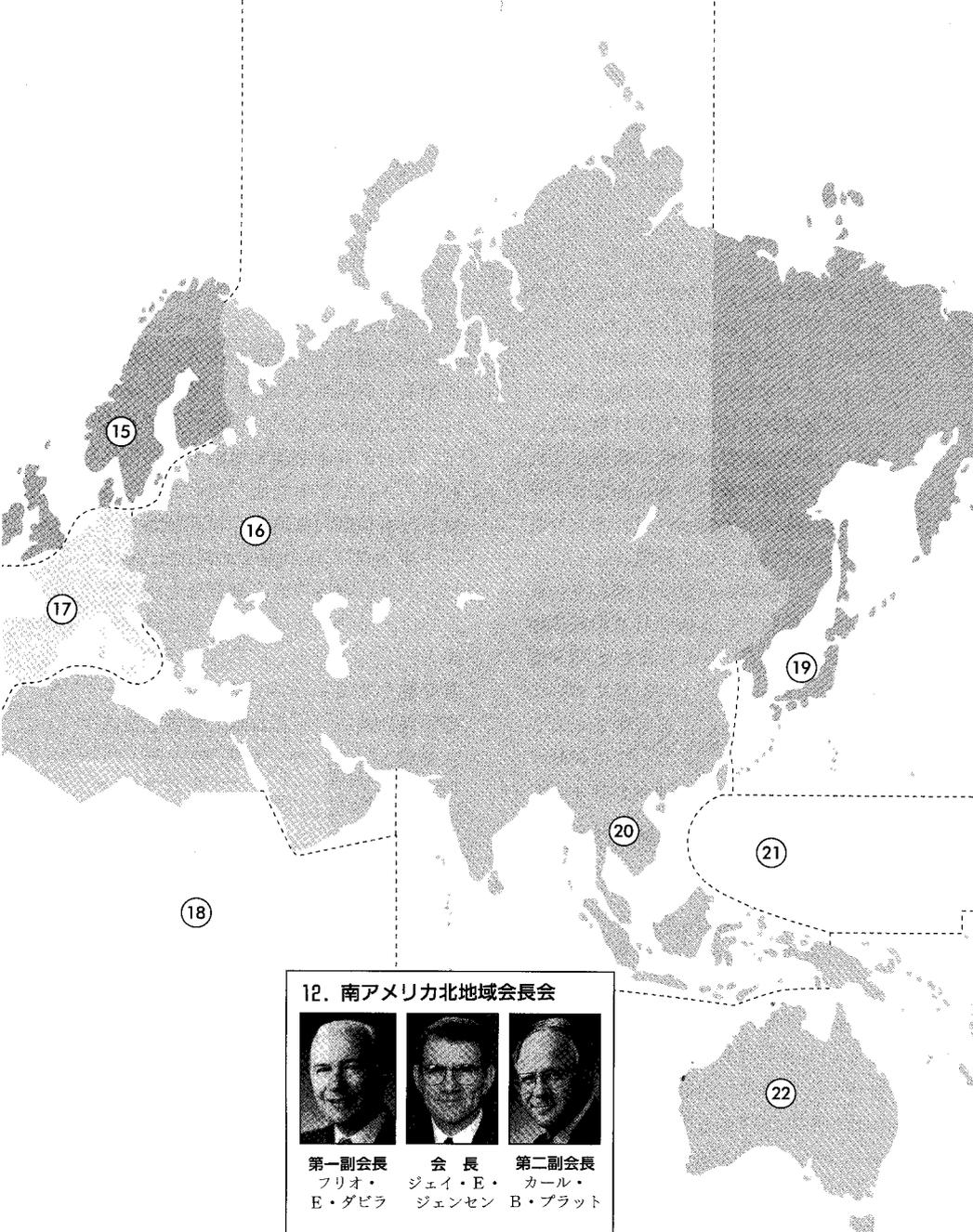


第一副会長 ジェームズ・E・パラモア  
会長 アール・C・ティンギー  
第二副会長 ジーン・R・クック

## 11. 中央アメリカ地域会長会



第一副会長 リノ・アルバレス  
会長 ジョセフ・C・ミューレン  
第二副会長 ホルヘ・A・ロハス



**17. ヨーロッパ西地域会長会**

第一副会長 ニール・L・アンダーセン  
 会長 ディーン・L・ラーセン  
 第二副会長 ディーター・F・ウーグトルフ

**18. アフリカ地域会長会**

第一副会長 F・デビッド・スタンレー  
 会長 J・リチャード・クラーク  
 第二副会長 ジェームズ・O・メーソン

**19. アジア北地域会長会**

第一副会長 サム・K・島袋  
 会長 デビッド・E・ソレンセン  
 第二副会長 レックス・D・ピネガー

**20. アジア地域会長会**

第一副会長 ジョン・H・グローバーグ  
 会長 戴國源 (タイ・クオック・ユン)  
 第二副会長 ルロン・G・クレープン

**12. 南アメリカ北地域会長会**

第一副会長 フリオ・E・ダビラ  
 会長 ジェイ・E・カール・ジェンセン  
 第二副会長 B・ブラット

**13. ブラジル地域会長会**

第一副会長 W・クレイグ・ズウィック  
 会長 ダラス・N・アーチボルド  
 第二副会長 クラウディオ・R・M・コスタ

**15. ヨーロッパ北地域会長会**

第一副会長 ジョン・E・ファウラー  
 会長 グラハム・W・ドクシー  
 第二副会長 セシル・O・サミュエルソン・ジュニア

**21. フィリピン・ミクロネシア地域会長会**

第一副会長 アウグスト・A・リム  
 会長 ベン・B・バンクス  
 第二副会長 ケネス・ジョンソン

**14. 南アメリカ南地域会長会**

第一副会長 F・メルビン・ハモンド  
 会長 ジョン・B・ディクソン  
 第二副会長 ヒューゴ・A・カトロン

**16. ヨーロッパ東地域会長会**

第一副会長 チャールズ・ディディエ  
 会長 デニス・B・ノイエンシュンダー  
 第二副会長 ブルース・D・ポーター

**22. 太平洋地域会長会**

第一副会長 V・ダラス・メルレル  
 会長 ローウェル・D・ウッド  
 第二副会長 クリー・L・コップフォード

# 牧師との面談で得た相互理解

## 広報活動の現場から



東京東ステーキ  
広報ディレク  
ター  
河南順一

**昨**今、全世界の末日聖徒イエス・キリスト教会で意欲的な広報活動が進められています。これらの活動は、メディアを活用し、地域社会と協力的な関係を築くことを柱として、教会に対する良い印象を築き、認知を高めることを目的としています。日本でも地道な広報活動が、会員や宣教師たちの模範や活動と結びついて、人々の教会に対する好意的な認識を広めつつあります。

一方で、一部の宗教団体の社会問題や刑事事件へのかかわりが取りざたされ、社会の宗教に対する受け止め方は厳しくなっています。また、末日聖徒に対する認知度は一般的にはまだ低いのですが、ごく一部に「モルモン教会」に対する誤った認識があることも事実です。

### 書面で牧師に面談を申し出て

誤解を与えるものの中に「わたしたちの教会は統一協会、エホバの証人、モルモン教とは関係ありません」といった注意書き入りのチラシがあります。中には「これらの宗教でお困りの方はご連絡ください」というメッセージを添えているものもあります。

今年の6月初旬、わたしの住む地域で、ある教会が同様のメッセージを添えて、新興宗教と社会問題に関する講演会の案内を広く配布していました。主催者の牧師は、「モルモン」に対してどのような認識を持っているのか、善処してもらうために自分に何かできないかと考え、祈りの気持ちをもって書面で牧師に面談を申し入れることになりました。

正直なところ、牧師がどのような態度をとられるのか心配でしたが、こちらの真摯な態度に牧師も誠意をもって応対していただき、話題も教義のほかに、教会員の生活、教育プログラム、教会の運営・活動と多岐に及びました。牧師は「不快な思い」をさせたことをわびて、モルモン教会が反社会的な行為を行っているという認識はまったくなく、教会から迷惑を被っているといった報告もなく確認している事実もないこと、「モルモン教会と関係ない」というのは教義上の解釈においてという意味であることを説明されました。そしてこの記述については削除する方向で対処したいと述べられました。

### 末日聖徒に対する他教派の反応

末日聖徒に対する認識について、他の教会員からも協力を頂き、状況を知る機会がありました。調べた範囲では、4つのプロテスタント系の教派に属する教会が「モルモンとは関係ない」というメッセージを公に発信しています。また、大手パソコン通信サービスでのキリスト教に関する電子会議でも同様のメッセージが掲げられています。

しかしながら、6,000人以上が参加するこの電子会議での問いかけや、通信で他教派のクリスチャンと意見交換をしている末日聖徒の報告からも、「モルモン教会」から迷惑を被っている、あるいは「モルモン教会」が問題を起こしているという認識を持つ人はいないことが確認できています。むしろ、末日聖徒と交わりのある教会外の人から得たコメントは、末日聖徒に良い印象を抱いており、肯定的なものとなっています。

カトリックやプロテスタントの教義は、三位一体を土台とする点で末日聖徒とは異なります。また、『聖書』のほかに『モルモン書』などの末日の聖典を持つことを理由に、彼らは末日聖徒を「伝統的」キリスト教とは区別し、「異端」という呼び方をすることもあ

ります。わたしたちの教会に対する誤った認識は、この教義の違いを正確に理解していないために作り出されることも多いようです。

しかし、末日聖徒のイエス・キリストに対する信仰は、ほかの教会の信者に勝ることはあっても劣ることはありません。面談の中で、イエスが救い主であること、わたしたちを贖ってくださったこと、そして『聖書』に書かれているとおり十字架にかかって3日後に復活されたことを証したときに、わたしたちは御霊に満たされ、牧師も大きくゆっくりうなずかれました。そして、教派は違っても、誠意をもって交われれば、キリストに従いたいという望みを分かち合い、それぞれの信仰に敬意を抱くすばらしい関係が築けることを二人で確認することができました。

### 「モルモン教会の会員の情熱には感心します」

穏やかな気持ちで面談を終えると、別れ際に牧師からこのような言葉をかけられました。「モルモン教会の会員のエネルギーや情熱には感心します。教会の体系的で充実した教育プログラム、洗練された運営形態はすばらしい。会員の教会へのかかわり方や奉仕の精神は、初期の教会に見られたものに通ずるものがあります。この点はわたしの教会でも見習いたいです。」

しかし、この牧師の見解や姿勢は、その教派を代表するものではありません。今回の体験から、ほかの人々の視点を謙虚に受け止める姿勢を持つことで、より積極的に末日聖徒を正しく理解してもらう機会を得ることができたと思います。

この牧師に送った書面では、以下を基本的なポイントとしましたが、この姿勢は教会に対する認識を正すためにほかの状況でも応用できるのではないかと考えています。

- ちらしの表記は、末日聖徒が社会問題を起こしているような印象を与えかねない懸念している。
- 末日聖徒と教会について認知度を高め、良い印象を持ってほしいと考えている。
- 一般の人々やほかの宗教の方々が末

日聖徒をどのように認識しているのかわりたい。

●末日聖徒は、イエスが救い主、贖い主であるとの『聖書』の記述を文字どおりに受け入れている。

●もし誤解があれば疑問などに答え、正しい認識を確立したいと望んでいる。

●教義について議論をする意図はない。

●末日聖徒が引き起こす問題や迷惑の事実があれば、謙遜に聞かせていただき、真摯な態度で教会として対処したい。

●末日聖徒は、家庭を大切に作る人に家族のきずなを強めることについてメッセージを伝えたいと考えている。

ヒンクレー大管長は次のように語っています。

「わたしたちはものの見方の異なる人々に対して単に寛容になるだけでなく、進んで感謝の気持ちを示す積極的な態度を培わなければなりません。い

かなる形であれ、わたしたちの教義や信条、天から神が啓示された永遠の真理についての知識を曲げる必要はありません。真理への証を、相手に対して攻撃的にならずに伝えることができるのです。」(1990年10月15日、ブリガム・ヤング大学礼拝集会)

わたしはこの経験を通してほかの教会の教えに接する機会にあずかり、今までに増して、自分が末日聖徒であることの恵みの大きさを確認することができました。イエスがキリストであることを証し、『聖書』が真実であることを証明する『モルモン書』が与えられていること、教会が神権により管理・運営されていることは大きな祝福です。

### 「あなたがたの光を 人々の前に」

昨今の複雑な時勢の中で、わたした

ちが伝道の歩みを速めるのはチャレンジといえるかもしれませんが、同時に末日聖徒を世に正しく理解してもらい、良い印象と認知を築いて教会がさらに発展するための機会も与えられているとわたしは思います。このことから、今日本の教会において、再活発化を含めた聖徒の完成をこれまで以上に着実に進めていく努力が求められていると感じます。また、末日聖徒イエス・キリスト教会についての正しい認識と理解を得るには、会員一人一人が模範を示すことが最も重要で効果的な方法であると知っています。

「あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」(マタイ5:16) (かわみなみ・じゅんいち 東京東ステーキ小岩ワード)

## 戦地に先祖を尋ねて

### ——沖縄での奇しき体験——

東京西ステーキ多摩ワード 高田勝哉

その日、那覇空港に降りたわたしを迎えてくれたのは、沖縄特有の真っ青な空ではなく、梅雨の雨にかすむどんよりした空と、非常に蒸し暑さでした。リゾートの涼しい木陰は、期待できそうもありません。しかしそれは問題ではありませんでした。わたしは、あの沖縄戦で亡くなった、ある人の足跡を見つけに来たのです。もっと正確に言えば、ここに来る促しを拒み切れずに、東京をたったのです。

3年ほど前、出張で那覇に来たわたしは、沖縄に強い興味を覚えました。海や空が気に入ったわけではありません。戦没者たちのことが気になったのです。沖縄戦についての本を買い求め、ひめゆりの戦記などを読み、いかに悲惨な戦争であったのかを思い知りました。

### だれかがわたしに 何かを伝えようとしている

その後、毎晩、夢で沖縄の風景を見るようになりました。3年間毎晩、山の中の入り組んだ道や断崖絶壁の景色などを見ました。そして時折、旧日本軍の軍服を着た一人の若者と、一緒に道を歩くのです。その若者の顔に見覚えはなく、会話を交わすわけでもありません。まるで道案内をしてくれているかのように、わたしの横を歩いてくれます。恐れを感じることもなく、懐かしい友と歩いているようでした。

わたしは、だれかの「気持ち」を感じていました。だれかがわたしに何かを伝えようとしているのです。それは不思議な感覚でした。怪しげなものではなく、静かな、霊的な気持ちです。独りぼっちでいる人が、慰めてくれる

人を求めている、そんな切ない訴えを感じるのです。

戦記に心引かれることや、夢で見る軍服の若者のことを思うと、どうも先祖に沖縄で戦死した人がいるような気がしてきました。しかし高田家の先祖にそのような人はいません。神殿の儀式も、ほとんど終わっています。

ある晩遅く、わたしは突然「家内の実家に行かなくてはならない」と感じました。今年の5月のことです。時間は午後10時を回っていました。そこに行けば、何かが分かると感じたのです。あまりにも切なく、抑え難い気持ちでした。「だれかが、自分の命日を思い出してほしがっている。」東京出身の家内の実家は、わたしの家から車で30分ほどの距離です。わたしは車を飛ばして家内の実家を訪ねました。「何もこんな時間に来なくても」と言いながら、家内の両親は、出身地の村の『従軍史』という分厚い本を出して来てくれました。そこには、村から戦争に出たすべての人の記事が載っています。もしかしたら家内の先祖に、沖縄で亡くなった人がいるのでしょうか。

いました。「本田庄一」、それが彼

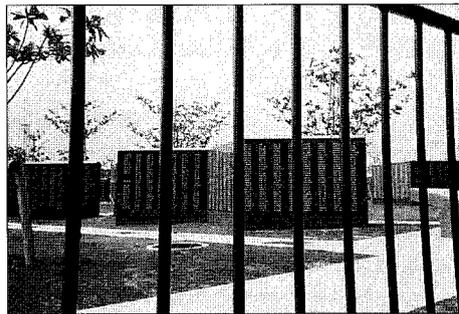
の名前です。彼は結婚直後に召集され、生まれ来る自分の息子の顔を見ずに、沖縄に配備されていました。そして激烈な戦火の中、ひめゆりの塔に近い島尻という所で亡くなっていたのです。理由は分かりませんが、彼の遺族は、彼を思い出したり、沖縄を訪ねたりすることを止められていたそうです。彼の母親は、彼が小さいときに亡くなっており、奥さんは、別な人と再婚しています。長い間、彼の命日を思い起こす人がだれもいなかったのです。彼の命日は6月17日。この夜の1か月後でした。

「沖縄に行かなくてはならない。」彼の命日が近づくとつれ、そう思いました。しかしそのころ、わたしの父は手術を要する病気を患い、出かけるどころではありませんでした。しかし家内が言ってくれました。「お金はないけれど、今行かないと一生後悔するわよ。」

## 23万人の名前の中から

6月16日、命日の前日、わたしは雨の降る沖縄の地に立っていました。本田庄一氏が延々行軍した道のりを、20キロ歩きました。雨滴も強烈な蒸し暑さも気になりません。空腹でもなく、弾丸も飛んで来ないのに何がつらいでしょうか。夢で道を見ていたので、地図は要りませんでした。この角を曲がると、次に川があって橋がある、ということが分かるのでした。

翌日、沖縄にいる教会の知人とともに、「平和の礎」の前を通りかかりました。戦後50周年を記念して造られた、23万人の戦没者の名前を刻む慰霊碑が立ち並ぶ広大な敷地です。びょうぶのような形をした美しい慰霊碑が、青い海を見下ろす緑の敷地に、円を描いて並んでいます。その日は除幕式前だったので、警備が厳重で、入ることは難しく、あきらめて一度前を通り過ぎました。しかし、入りたいという願いを捨て切れません。ここに彼の名前もあるはず。近くに作業をしている人がいたので、自分は東京から来たことを告げ、何とか入れないだろうかとお願ひしてみました。すると彼は、「1か所だけ鎖が外れている所があるから、



(上) 戦後50周年を記念して造られた慰霊碑「平和の礎」。

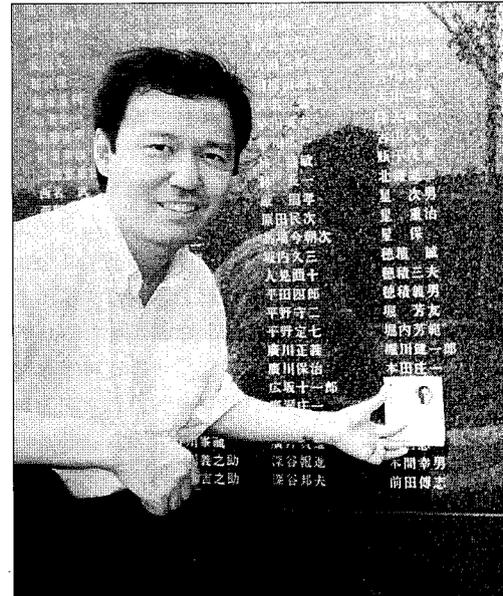
(右) 23万人の戦没者の名前が刻まれた慰霊碑の中に「本田庄一」氏の名前を見いだした高田兄弟。

そこから入りなさい。でもあまり歩き回らないように。警備員に見つかるから」と言ってくれました。わたしは喜び勇んで中に入りました。しかし、23万人の名前の中から彼の名前を見つけ出せるわけがありません。慰霊碑は無数に並んでいるのです。

敷地に2、3歩足を踏み入れた所で、いちばん近くの碑に目を向けました。すると、一つの名前がわたしの目に飛び込んできました。そこには「本田庄一」と、刻まれているではありませんか。その日外されたチェーンの目の前の碑に、彼の名前があったのです。「彼が、わたしたちをここに呼んでくれたんだ。」案内をしてくれた知人とわたしはともに驚き、感謝の気持ちに満たされました。この日は、彼の命日だったのです。

別の日に、わたしは「一中健児の碑」と呼ばれる別の慰霊碑の前に立っていました。夢で見たと思われる道をたどって行くと、そこに着いたのです。後で知りましたが、一中とは旧首里一中のことで、その生徒たちは、兵隊と一緒に戦いに加わっていたのです。

その後、当時の戦火を知る一人の教会員と会う機会がありました。彼は、なぜ観光ルートとまったく離れていたのか、わたしに聞きました。わたしが「夢で見たからです」と答えると、彼は本田庄一氏の写真をずっと見ながら（15分ほど無言



で見えていました)、「彼に会ったことがある気がする」と言います。そしてこう続けました。「あそこはね、この人の部隊が駐屯していたところなんだよ。わたしは一中の生徒として、その部隊と行動を共にしていたんだ。」

## 命日に新たに発見された遺骨

導きはそれだけでは終わりませんでした。すべての予定を終えた沖縄滞在の最後の日、朝食を取ってホテルの自分の部屋に戻ってみると、ベッドの上に電話帳が開いたまま置いてありました。わたしが置いたわけではありません。なぜ掃除の人が片付けなかったのかなと思いつつ、そのページをのぞくと、「沖縄戦フィルム1フィートの会」という欄に目が止まりました。興味を引かれたので、そこに電話をしてみました。相手の人に、わたしが沖縄に来た経緯を話すと、「すぐに事務所に来なさい」と言います。驚いてしまいました。

事務所に行ってみると、(本田庄一氏の命日に当たる)17日に新たに一つの遺骨が発見されたということで、それを見せてくださいました。発見された場所は、本田庄一氏が戦死したといわれる所でした。

目の前に黒い骨が置かれ、事務所の人が言いました。「どうぞ、触ってあげてください。その人のものかもしれ

# 3人の子供を伝道に送り出して

——優先順位を正すことの大切さ——

広島ステーキ柳井支部 古谷須美恵

ません。」生まれて初めて触る遺骨は、火炎放射機で焼かれたのか、陸軍のベルトのバックルが溶けて焼きついていました。確証はありませんが、その骨が本田庄一氏のものに思えてなりませんでした。

東京に帰ってすぐに、神殿で彼のための身代わりの儀式を受けました。按手を受けているとき、心の中に、軍服を着たあの青年がやって来ました。右腕にけがをしていて、包帯でついています。彼は静かに頭を下げ、消えて行きました。心に鮮明に残ったその姿を、わたしは神殿のロビーで手帳に描きました。今もそれを見る度に、細部まで描けていて驚きます。

## 幕のかなたからの伝道

洗い清めを受けるとき、儀式を受けるブースの前の長いすに腰掛けていました。すると菊地良彦神殿長が来られ、わたしの経験を聞いてくださいました。話している途中で、おかしなことに気がつきました。神殿長は、わたしの隣に座らないで、ソファの端の方に座っていらっしゃるのです。そのことを尋ねると、菊地長老はこうおっしゃいました。「その青年が、あなたの隣に座っているからです。だから間を空けているんですよ。彼はほんとうにうれしいんですね。」神殿長の目に涙が光っていました。わたしも泣いていました。

わたしは、最初、彼を救ってあげなくては、という気持ちで行動していました。しかし、救われたのはわたしの方でした。恐らく彼は、弱いわたしがこの経験を通して、証を得ることを知っていたのです。家長として堅く立つために、この経験が必要なことを知っていたのです。この出来事は、わたしの家族の心を主に向けさせ、皆に霊的な洞察を与えてくれました。そして、この話を聞く教会員でない友人の心を感動させてくれます。彼の子孫で、彼のために神殿の業を行える教会員は、確かにわたしたちだけでした。しかし、実は神殿という聖なる場所を通して、彼は幕のかなたから、わたしたちに伝道してくれたのです。(たかだ・かつや 長老定員会第一副会長)

わたしが教会員となつてはや28年が過ぎました。結婚してからバプテスマを受けましたので、神殿に初めて参入し、家族が結び固められたのは、3人の子供たちが小学生になってからです。家族5人が、真っ白い服を着て、結び固めの部屋で厳かに神聖な儀式に臨んだことが、つい昨日のことのように思い出されます。

それから十数年がたち、現在、長男は公務員になり、岩国で教会員の方々の助けによって、幸せなモルモンの家庭を築いております。長男は大学時代に沖縄伝道部で伝道しました。沖縄の人々の人情豊かな人柄に接しての伝道は、長男に霊的成長をもたらし、温かい心の大切さを教えてくれました。

次男は今大学生で、今年の3月、福岡伝道部での伝道を終えて帰還しました。次男が伝道に出る前は「良い宣教師になれるだろうか」と母親としてとても心配しましたが、2年たつてわが家に帰って来た次男は霊的に非常に成長しており、家族で喜びを分かち合

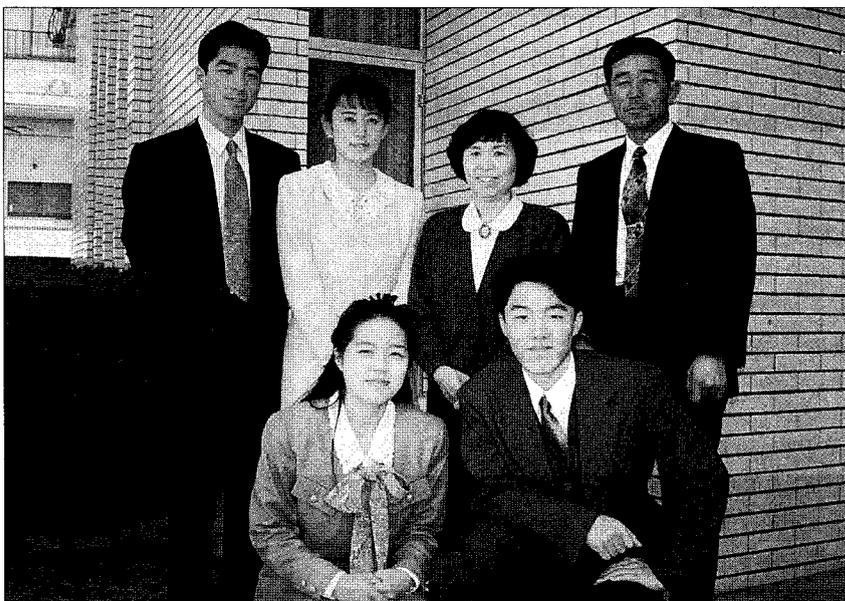
ました。これはひとえに、伝道地の会員の皆さんのおかげだと心から感謝しております。

長女は4年間務めた保育園を退職して、6月に名古屋伝道部に召されて旅立ちました。「1年半、頑張ってきました」と東京行きの高速バスに乗り込んだ長女は、最高の笑顔でした。

3人の子供たちを宣教師として見送り、母親としての役目を果たせたような、安堵感と喜びがあります。これまでの信仰生活を振り返ってみると、福音を分かち合ってきた家族との思い出の一つ一つが浮かんできます。

## 「子供たちの霊が福音を聞いていますよ」

次男が誕生した昭和48年ころは高度成長時代で、主人の会社も日曜日の出勤が多く、わたしは生まれたばかりの次男を抱っこし、2歳の娘は人見知りがひどくわたしのそばを片時も離れず、長男は初等協会へ行くのをむずかり、教会へ子供たちを連れて出席するのが



古谷御家族。後列左より明寛（長男）、和美御夫妻。須美恵姉妹。三男兄弟。記子姉妹（長女）。佳寛兄弟（次男）。

大変疲れる時期もありました。ちょうどそのころ、柳井へ訪問された大阪の指導者が次のように言われました。「子供たちは今は幼くて思うようにいけないけれど、子供たちの霊が福音を聞いていますよ。」この励ましの言葉が、そのころのわたしの支えとなりました。

また、扶助協会の家庭教育においてはいつもすばらしいレッスンを通して、サタンが全勢力を傾けている世の中であって、天父から授かった子供たちをいかに育て導いていけばよいか学びました。母親として教会で学んだ教えを家庭で実行し続けるのはとても大切ですが、わたしは時としてその務めを忘れることがありました。それは長男が大学受験を控えたころでした。

わたしは世のお母さんがたと同じように、長男に受験勉強をさせることで頭がいっぱいでした。そのころのわが家には、家庭の夕べはありませんでした。そのような状況のためか、当時中学生だった次男はわが家の福音の輪から一人取り残されていました。そのころの次男は「お母さん、人間の最初は

猿人だったんだよ。知らなかったの」と、進化論を得意げに話していました。このまま次男を主の教えから遠ざけてはならないと、ひざを交えて話し合い、家族の祈りを始めました。次男の心は少しずつ変わっていき、教会員宅で行われる早朝セミナーへ進んで出席するようになりました。

月日がたち、今度はその次男が大学受験を迎えたころは、年ごとに受験生が増えてピークに達した年でもあり、わたしは再び長男のときと同じように受験のことに夢中になっていました。そのころのわたしは扶助協会の責任さえも重荷に感じていました。毎月の家庭訪問が特に早く来るように思えて、訪問を延ばし延ばしにすることがありました。

### 母親の信仰が不安定なとき、 子供の信仰も揺らぐ

ふと気がついたとき、当時短大生だった長女は、幼いころからの夢であった「宣教師になって伝道に出たい」という気持ちをなくしていました。教会へは集っていたのですが、福音に

対して消極的でした。わたしは自分自身が優先順位を間違っていたことに気づき、悔い改めをして、家庭訪問100パーセントに向けて努力しました。長女の気持ちも変わっていきました。長女はその後、就職してからの4年間で伝道の備えのみにかけました。

モルモン2世は感動的な改宗がないだけに、母親はまことの福音を教え、信仰のある模範を示し続けなければなりません。母親の信仰が不安定なとき、子供の信仰も揺らぎます。母親が扶助協会で学んだ教えを実行し、召された責任を一生懸命果たすとき、子供たちは福音とともに成長することを証します。福音を学んでいる子供たちは、優しく正直で、光っており、学業にも専念でき、良い結果が得られることを証します。

「汝らわが言うところを行わば、主なるわれこれに対して責任あり。されど、汝らわが言うところを行わずば汝ら何ら約束を受けず。」(教義と聖約82:10) (ふるたに・すみえ 支部扶助協会書記)

## 決心することの祝福

——札幌、東京神殿間を車で往復——

札幌西ステーキ新琴似ワード 風間信彦

今年の3月末、わたしたち夫婦と新琴似ワードの教会員6人がわたしの車で東京に向かい、4日間ほど神殿に参入しました。参入に当たっては大きな決心が必要でした。年度末の忙しい時期に1週間の休みを取るの容易でなく、また、子供たちをどうするかも問題でした。

けれども決心して取りかかると問題は自然に解決したのです。まず、2月の初めに職場の上司に休暇を申し出ると「だめだと言っても行くのだろう」と許可をもらうことができました。子供たちの方も家内の両親が快く引き受けてくれました。

その後もフェリーの予約など準備は

大変でしたが、結局、札幌から東京まで二人が交替で運転しました。不案内な道に迷うこともなく早目に着くことができ、多くの儀式に参加できました。4日間、わたしたちはおもに死者のための身代わりのバプテスマの奉仕をさせていただきました。

札幌西ステーキで参入した3日間に3,100人以上の死者のための身代わりの儀式を行うことができました。最初は多くても3,000人はできないだろうと思っていたのですが、終わって神殿宣教師の方から3,100人以上ですよと言われ、驚きとともにうれしさが込み上げてきました。一緒に行ったステーキの会員、特に若い男性・女性の多く

の奉仕がなければ、これほどたくさんバプテスマのお手伝いは無理だったと思います。4日間の神殿参入はすばらしい経験でした。

札幌までは無事に帰って来ましたが、最後の姉妹を送って家の前まで来たときに、接触事故を起こしてしまいました。「なんで神殿の帰りに事故に遭うんだらう」と気持ちが落ち込み、なぜなぜと心の中で問うばかりでした。

ともかく、事故により破損した車を修理に出し、そのときにほかの箇所もついでに点検してもらいました。すると、ATオイルがほとんど入っていないと言われ、まさかそんなはずはないとびっくりしました。事故では車体に傷が付いただけだったからです。

詳しくエンジンを調べてもらうと、オイルがなくなってから1か月以上たっていることが分かりました。修理を担当した人に、この車で東京まで往復してきたことを話すと、信じられないと言われました。もしこの事故がな

ければ、車のATオイルがないのも知らずに乗り続けたことでしょう。その結果どんなことになっていたかと思うと、冷や汗が出る思いでした。

神様の助けと見守りの中で今回の神

殿参入を無事に終えることができたことを心から感謝します。また、決心することにより、神様が必要<sup>あかし</sup>なときに必要な助けを下さることを証します。  
(かざま・のぶひこ 第二副監督)

ために家族で神殿に行きました。身重だったわたしは無事、身代わりのバプテスマを終え、夫と子供たちの待つ宿舎に戻りました。すると夫が、「もう二度と神殿には来ない」と言うのです。わたしは、夫と一緒に神殿に参入するまではエンダウメントを受けないと夫に言っていました。ところが、夫は「おれが死んでから、だれかに身代わりで結び固めてもらいなさい」と言います。

そのころの夫は、毎日1リットルのコーヒーを会社に持って行き、たばこも二日で1箱ぐらい吸っていました。それでも、教会の行事については話していましたので、時々気が向いたら参加してくれましたし、長女が生まれ車を購入してからは、教会まで毎週送り迎えもしてくれていました。

1990年に夫の弟が神殿で結婚することになりました。身内ではだれも神殿に参入できる人がなく、わたしも参入の決心がつきませんでした。夫の母が亡くなる前、弟の結婚についてはくれぐれもよろしくと頼まれていました。それでも迷っていると、ある姉妹から「神殿に入る資格のある人は参入した方がいいよ」と言われ、よく考えた末、監督に相談しました。夫にそのことを話すと、「参入だなんて、そんなお金はどこにある」と言われましたが、ちょうどそのころ暖房手当てが支給され、そのお金で参入できることになりました。

### 「今やらなければ、 きっともうできない」

いよいよ自分のエンダウメントを受けることになったわたしは、その前にどうしても夫とわたしの3代以上前の系図を提出しよう<sup>と</sup>と決心しました。いちばん下の子が1歳半とまだ手がかかる中、教会員の助けを借り、なるべく夫のいないときに書くようにしていました。系図を書いているのを見ると、夫はいつもいやな顔をしていたからです。

1か月で150枚以上の家族の記録を書き上げましたが、残りの10枚は時間がなかったので、参入の合い間に書くことにしました。「今やらなければ、

## 8年間離れていた教会に

### ——家族で結び固めを受けられる喜び——

札幌西ステーキ新<sup>こと</sup>似<sup>に</sup>ワード 風間禎子

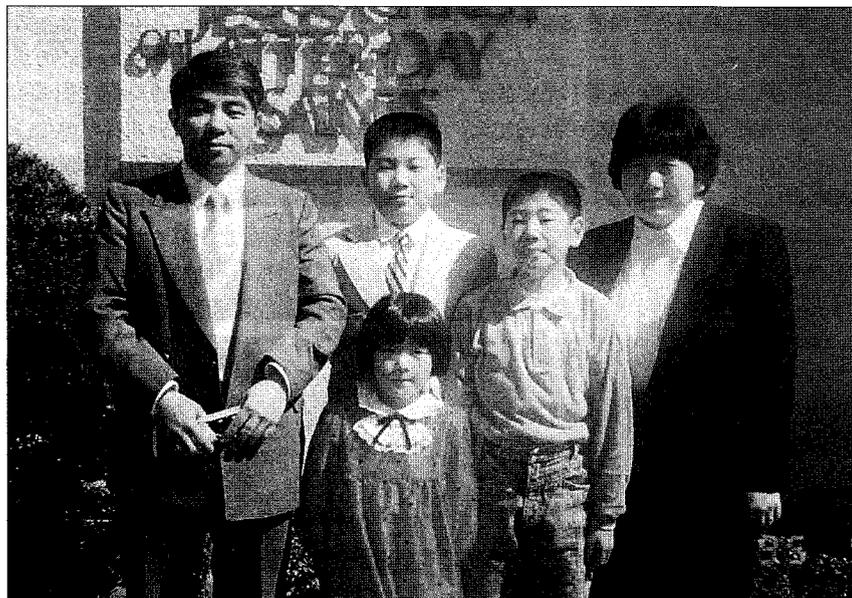
1974年6月、小樽<sup>おたる</sup>で宣教師からレッスンを受けたとき、わたしはまだ15歳でした。父から若すぎると反対され、バプテスマの許可が得られたのは20歳の誕生日を迎える2日前でした。当時、わたしの夫となる風間兄弟は彼の弟により、わたしより2年早くバプテスマを受けていました。わたしは風間兄弟によりバプテスマを受け、1か月後に彼はメルキゼデク神権を受けました。それから少しして、二人とも教会から遠ざかってしまいました。

1980年、神殿が東京に建ち、地域大会が開かれると聞いたわたしは教会に戻る決心をし、大阪での地域大会に出席しました。1975年の地域総大会で、神殿が日本にも建てられると発表されたときから、いつか愛する人と神殿で

結び固められたいと思っていました。

しばらくして、風間兄弟も教会に出席するようになりました。ですが、ある事情により風間兄弟はふたたび教会から離れてしまいました。それにもかかわらず、わたしは風間兄弟との結婚を決意したのです。結婚する前に悩んだわたしは、支部長に相談しました。そのときに「一人の兄弟を生かすも殺すも姉妹にかかっているのだよ」と言われ結婚を決意し、この言葉を一生大切に生きていこうと思いました。結婚して1年後、仕事の関係で札幌に引っ越し、その後二人の男の子に恵まれました。それでも夫はほとんど教会に顔を出しませんでした。

1988年に、彼の母とわたしの祖母の死者のための身代わりのバプテスマの



風間御家族

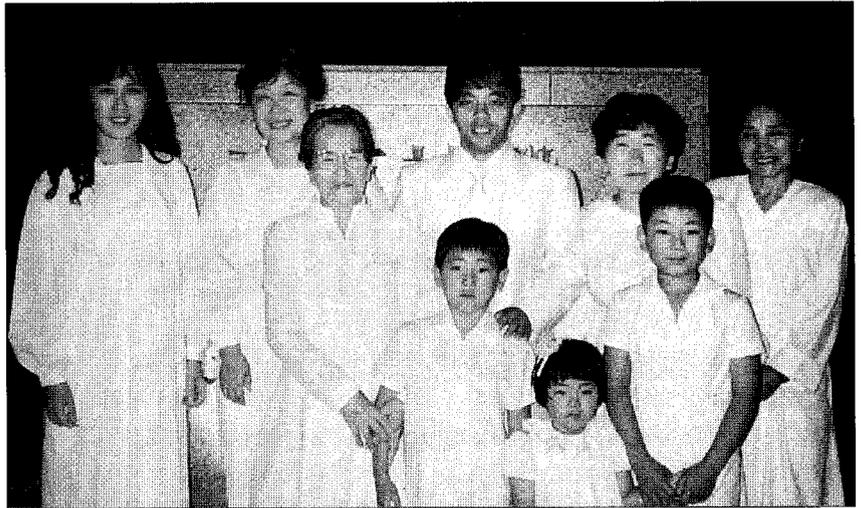
きつともうできない。」そう思い、飛行機の中や宿舎の布団の上、最後には神殿のロビーで書きました。そして、それらを無事提出することができたのです。弟の結び固めを終え、儀式を受け、日の栄えの部屋に入ったとき、わたしが思っていたよりもずっと早く夫が戻ってくると感じることができました。

札幌に帰ると、夫はおもしろくない顔をして、参入前には許していた長男のバプテスマを受けてはだめだと言いはりました。長男はバプテスマを楽しみにしていたので、受けられるように一生懸命お祈りをしていました。夫は教会員や宣教師の説得にもまるで耳を貸してくれません。そこで、当時神殿宣教師をしていたある姉妹に、神殿での祈りに夫と息子の名前を加えてもらいました。

そうした中、夫はある晩、夢を見ました。2階建ての大きな家の1階にわたしと子供たちが、2階に夫と宣教師のような外国人がいました。夫はどうしても1階にいるわたしたちの所に来たかったのですが、その夫を助けてくれたのはその外国人でした。そこで目が覚めました。その話を聞かれた伝道部長夫人から「その外国人はイエス様ですよ」と言われた夫は、そのときから少しずつ変わっていきました。そして、息子の信仰と祈りは聞かれ、夫の許しを得て無事バプテスマを受けました。夫も教会に戻ると言ってくれ、翌週から言葉どおり8年間離れていた教会に集ってくれるようになりました。

1年後、夢にまで見た家族の結び固めを受けに東京に向かい、夜の町に神殿の塔が見えてきたとき、やっとたどり着いたという喜びが込み上げてきました。こうして、わたしたち家族は永遠の結び固めを受けることができました。また今年の3月には、夫とふたたび神殿に参入することができました。

そして5月、長男が夫の手で神権を授けられたとき、ほんとうに家族みんな福音を実践できる喜びを感じました。神様はわたしたちの考えている以上にわたしたちを愛してくださっていることを証します。(かざま・ていこ ワード扶助協会書記)



家族で結び固めの儀式を受けたときの風間御家族

## 家族で ずっといっしょに

風間仁美

わたしは結び固めをうけたとき、とてもうれしかったです。家族でずっといっしょにいられることをかんしゃします。(かざま・ひとみ 6才)

## 感謝していること

風間伸司

1. 教会に行けることを感謝しています。
2. 生きていることを感謝しています。
3. 家族がいることを感謝しています。
4. 生まれてきたことを感謝しています。
5. 結び固めができたことを感謝しています。(かざま・しんじ 10才)

## 永遠に 結ばれることを 心に思いました

風間孝志

ぼくは4才のときに初めて神殿に行きました。そのときのことはよく覚えていません。1992年にぼくたちは結び固めをするために神殿に行きました。お父さんとお母さんを待っているときドキドキしました。結び固めの部屋に入って結び固めをしました。永遠に結ばれることを心に思いました。

神殿に参入する前にすいせん状をもらうとき、ぼくはほんとうにもらっているのかわかりませんでした。心の清い人しかすいせん状をいただけません。ぼくは5月に神権を受けられたので、また、すいせん状をもらって神殿に行きたいです。神殿は天のお父様とイエス様と聖霊が住むところだと証します。(かざま・たかし 12才)

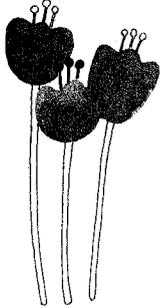


# きょう 今日を精いっぱい

秋田地方部酒田支部  
堀 潤

## 空

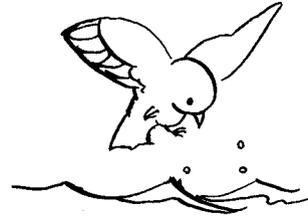
空はどうしてこんなに美しいのだろう  
太陽のかけらがきらめきあふれる中  
鳥たちが空で歌い  
魚たちが海で遊ぶ  
子らは水際で戯れる  
寄せては返す波  
それは永遠の天父の愛  
決してやむことのない永遠の愛  
波の音は時に激しく  
時に静かに  
それは御<sup>みたま</sup>霊のささやきのよう  
空の色にこたえる海の深い青さに  
心が癒<sup>いや</sup>されていく  
限りなく優しいその青さの中  
天父に少しでも近づけるよう  
ぼくの精いっぱい  
今日も波にはじける  
永遠の夢が駆けていく



## 花

日の光を十分に受けて美しく咲く花に  
大切なことを見つけたよ  
与えられた空で  
精いっぱい丈を伸ばし  
すべてを恵む天に向かって咲いている  
ぼくも今日を精いっぱい喜んで  
すべてをゆだね  
天を仰いで眠りに就こう  
天の夢が見えるかもしれない

(ほり・じゅん 支部伝道主任)



## ブックセンターから

### 新刊の紹介

改訂新版

『末日聖典合本』

12月11日発刊予定

カタログ番号34404 300 1,200円

当教会の標準聖典である『モルモン書』  
『教義と聖約』『高価な真珠』の合本。

◎A5判変形 (21×13.3cm)

ハードカバー 1,468頁

◎376頁におよぶ『聖句ガイド』には、  
テーマ別に聖典を研究したり、話や  
レッスンの準備をする際に活用できる  
資料を豊富に収録。『聖書』のジョセ  
フ・スミス訳(抜粋)、聖書関係と末  
日聖徒イエス・キリスト教会の歴史上  
の地図、地名索引、史跡写真付き。

『小型新約聖書』

(日本聖書協会発行、口語訳)

86210 300

800円

詩篇付き、クロス装、A6判

『最後の一葉』(英語版)

53013 ビデオカセット 24分 350円

少女の命を救うために自らの命を犠牲  
にした画家の物語。イエス・キリスト  
の贖いの一つのたとえとして用いるこ  
とができる。

『若い女性キャンプ歌集』(英語版)

52533 カセット 120円

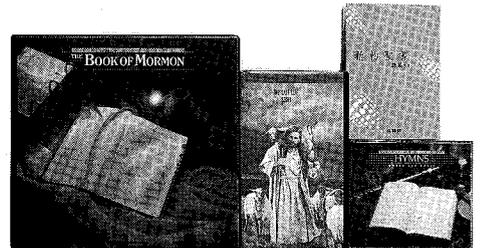
50045 CD 150円

『若い女性キャンプ手引き』(34573  
300)に掲載されている全曲を収録。

『賛美歌』英語版CD

50166 (英語歌入り、14枚組) 1,800円

英語の賛美歌全曲を収録。



### 価格改定

『聖書』(口語訳・日本聖書協会)

86201 300 小型(A6判) 2,100円

86202 300 中型(B5判) 3,100円

86203 300 中型革装 9,000円

86229 300 大型(A5判) 4,000円

86217 300 大型印照付 4,300円

『モルモン書』カセットテープ

(英語朗読、全23巻、デジタル新録音)

52047 2,200円

『賛美歌』英語版CD

50866 (伴奏のみ、14枚組) 1,800円

# 10月に召された専任宣教師

JMTC 第193期生 15人



前列左から1-7, 後列左から8-15

(名前)	(出身地)	(伝道地)
1. 宮里和江	沖縄那覇S/浦添B	東京北伝道部
2. 長田百世	沖縄那覇S/沖縄W	札幌伝道部
3. 川村永子	仙台M/盛岡D/盛岡B	名古屋伝道部
4. 菅原知子	仙台S/青葉W	札幌伝道部
5. 塩田弘美	仙台S/青葉W	福岡伝道部
6. 森田徳恵	仙台S/石巻B	名古屋伝道部
7. 高山めぐみ	名古屋S/岡崎W	札幌伝道部
8. 高本啓顕	東京西S/八王子第二W	札幌伝道部
9. 松下仁一	京都S/下鴨W	沖縄伝道部
10. 松藤成和	京都S/大津W	東京南伝道部
11. 鈴木里英子	東京北M/宇都宮D/古河B	岡山伝道部
12. 重松千歳	我孫子S/つくばW	沖縄伝道部
13. 明神陽子	岡山M/松山D/宇和島B	東京北伝道部
14. 二谷泰世	神戸M/福知山D/舞鶴B	東京北伝道部
15. 洞彩子	福岡M/熊本D/熊本北B	札幌伝道部

S:ステーキ, M:伝道部, D:地方部, W:ワード, B:支部

## 海外に召された日本人宣教師



宇根 縁  
ソルトレーク・テンブルスクウェア  
訪問者センター伝道部,  
1995年8月, 大阪  
堺S/和歌山W



原田志保  
ワシントンD.C.  
南伝道部,  
1995年10月, 東京  
北M/長野D/長野B

## 役員の変動

1995年9月13日から1995年10月12日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の変動(敬称略)

- 仙台伝道部青森地方部  
新地方部長: 山田 正
- 仙台伝道部郡山地方部郡山支部  
新支部長: 佐崎秀樹
- 東京北ステーキ川越ワード  
新監督: 山口 博
- 名古屋ステーキ豊橋ワード  
新監督: 松野六郎
- 神戸伝道部福知山地方部相生支部  
新支部長: 山下芳直
- 神戸伝道部御坊支部  
新支部長: 木下文夫
- 神戸伝道部奈良地方部奈良支部  
新支部長: 小野敏男

## ユニットの変更

- 神戸伝道部奈良地方部大和郡山支部新設(1995年9月17日付け。奈良支部より分割)  
新支部長: 東 和明

皆さんの原稿を  
募集しています

◎御投稿の際には連絡先(住所, 電話番号), 教会での責任(役職名), 所属ユニット名と併せて生年を記入し, 写真を同封のうえお送りください。原稿は一部手直しさせていただくことがあります。また, 掲載までに時間がかかる場合もありますので, 御了承ください。

◎お願い——海外に召される日本人宣教師たちを紹介いたしますので, 伝道の召しを受け取り次第, 『聖徒の道』編集室に写真を添えてお知らせください。(氏名〔フリガナ〕, 伝道部名, 召された月を明記)

◎あて先: ☎106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会 『聖徒の道』編集室  
☎03(3440)2666 FAX 03(3440)3275